

海外協力の 現場から

エル・サルवादール編

青年海外協力隊員の
記録

昭和55年12月

国際協力事業団
青年海外協力隊事務局



JICA LIBRARY



1020509[4]

国際協力事業団	
受入 月日 5'84.75.22	609
	36
巻録 No. 06573	JVP

序にかえて

昭和55年12月 青年海外協力隊事務局長 野村 忠策

青年海外協力隊が発足して15年を経た。昭和40年末から41年初にかけて1次隊の隊員約30名がフィリピン、マレーシア、カンボディア、ラオスの4ヵ国へ派遣されて以来、今日までに約3,400名の隊員が28の開発途上諸国へ派遣された。協力隊創設にかかわりをもった者のひとりとして、今昔の感に耐えない。

同時に、このような協力隊の発展を見るにつけ私は、受入各国で高い評価を培ってきた隊員および、本事業の意義を理解して協力隊を育てることに地道な努力を傾注されてきた政界および都道府県の方がた、青少年運動指導者をはじめ広範な関係者各位に対して深甚なる敬意と感謝の意を表したい。

さて、協力隊事務局では昭和54年度から、隊員が事務局へ提出した業務報告書を国別にとりまとめ、『海外協力の現場から』と題して報告書集の刊行を始めた。幸い、各界から「協力隊員の生々しい活動と生活状況に触れて感動をおぼえる」との好評をいただいたので、本年度もネパール、トンガ、西サモア、ホンデュラス、エル・サルヴァドル、コスタ・リカ、ボリヴィア、シリア、ガーナの9ヵ国編を刊行することとした。

いうまでもなく、協力隊員の活動は、開発途上諸国の国づくり、人づくりに“草の根”で協力しようとする我が国の青年のボランティア活動である。日本とは全く異なる文化社会で、そこに住む人びとと共に暮らし、共に働くことには種々の“壁”があり、時には挫折感にとらわれる。報告書は、その壁を乗り越えて新しい協力手法を生み出そうと日夜努力している隊員の哀歓に満ちた貴重な体験の記録である。協力隊事業の財産であると同時に、我が国、我が国民全体の財産でもある。

私は本事業は隊員受入国にとってはもちろん、我が国の将来にとっても素晴らしい事業であると確信している。今後の本事業の飛躍的発展のためには国民各位の御理解、御支援が不可欠である。一層、御理解を深めていただくうえで、この報告書集が活用されれば幸甚である。末筆ながら、報告書集作成に御協力願った関係職種の技術専門委員の方がた、ならびに隊員(OB)諸君に謝意を表する次第である。

エル・サルヴァドル編

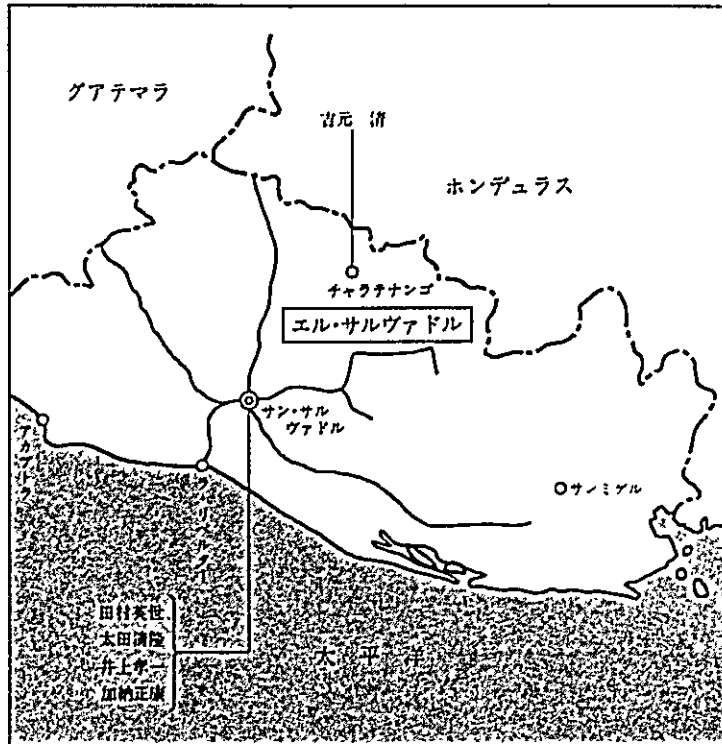
目 次

序にかえて	野村 忠策	(1)
○国立芸術高校での陶芸指導	田村 英世	(5)
日本に帰って考えること	田村 英世	(20)
田村隊員の報告書を読んで	新川 昭一	(21)
○バレーボールの指導にあたって	太田 清隆	(25)
追想と現在	太田 清隆	(37)
太田隊員の報告書を読んで	吉村 恒男	(40)
○国立高校付属農場で土壌学実験を担当	吉元 清	(43)
吉元隊員の報告書を読んで	宇野 要次	(58)
○体育学校でのレクリエーション指導	井上 孝一	(61)
日本に帰って考えること	井上 孝一	(70)
井上隊員の報告書を読んで	関 四郎	(73)
○日本語教育の現状と問題点	加納 正康	(77)
日本に帰って考えること	加納 正康	(98)
加納隊員の報告書を読んで	椎名 和男	(101)
あとがき	高橋 成雄	(104)
(付) エル・サルヴァドルと協力隊		(2)
エル・サルヴァドルの略図と概要		(3)

エル・サルヴァドルと協力隊 (昭和55年12月1日現在)

最初の隊員派遣：昭和43年9月								
職種部門	農林水産	加工	保守操作	土木建築	保健衛生	教育文化	スポーツ	合計
派遣中								0 (0)
実績 (累計)	4 (0)	1 (0)	3 (0)			18 (10)	48 (7)	74 (17)

(注) カッコ内は女性隊員。



エル・サルヴァドル共和国概要

面積：21,041平方キロメートル
 人口：418万6,300人（人口密度191人/km²，人口増加率3.47%）
 宗教：ローマン・カトリック
 公用語：スペイン語
 1人当たりの国民所得：503ドル（76年国連推計）
 通貨：コロン（1コロン=100セントボ），1ドル=2.5コロン
 首都：サン・サルヴァドル（人口46万人，75年）
 政体：3権分立の立憲民主共和制
 元首：カルロス・ウンベルト・ロメロ大統領
 主な生産物：コーヒー，綿花，とうもろこし，フリホール豆，米，砂糖



国立芸術高校での陶芸指導

全報告書	
派遣国	エル・サルヴァドル 48年1次後期組
職種	造形美術(陶芸)
氏名	田村英世
配属先	文部省文化総局国立芸術高等学校 サン・サルヴァドル

田村隊員の略歴

氏名	田村英世
生年月日	昭和25年6月21日
出身県	東京都
職種	造形美術(陶芸)
派遣期間	48年10月～51年4月

I 業務計画と赴任の経過 (1974年4月21日提出の業務計画書より)

1. 任務内容

エル・サルヴァドル国文部省文化総局国立芸術高等学校における造形美術(陶芸)の指導。

2. エル・サルヴァドル国政府の受け入れの姿勢と体制

日・サ両国の派遣協定により文部省、文部大臣に着任の挨拶を行ない、今後2ヵ年の協力を約束した。現時点ではエル・サルヴァドル政府の「技術協力担当」部門のJOCVに対する理解度、協力の姿勢等を報告するには、あまりにも時期尚早なので、ここでは書かない。

3. 技術協力の予定計画

⑧ 陶芸は素材(造形的・組成的土質の特徴)に拘束されるうえ、その素材の性質を簡単に理解することは難しい。故に、その素材を使って実技を中心に陶土についての講義を繰り返しつつ授業を進める。そして、現在まで当国で原料・技術の欠如等で試みられなかった高火度陶芸の定着というレベルにまで、もってゆきたいと考えている。

⑨ 故に任期の前半を高火度陶芸のための素材研究と低火度陶器の充実にあて、後半で、その高火度陶芸を行ないたい。

4. 現地で接触した人々

⑩ エル・サルヴァドル国……文部大臣、文化局長、体育学校長、芸術高等学校長。

⑪ 日本国……平松代理大使、西沢書記官、榎戸事務官、伊藤職員、国際協力事業団の後藤氏。

⑫ 隊員としての地位

国立芸術高等学校造形美術部門の陶芸の教師。陶芸専攻教室には、エル・サルヴァドル国の教師もおり、彼と同等の地位。その他に助手が5名いる。

5. 現地生活の実情

⑬ 着任……赴任先へ到着したのは10月末日であった。ちょうど配属先の学校は学期末の試験中であった。専攻生も来年度は1人もなく、これといって特に仕事がないので自分の仕事場の整理、前任者との引き継ぎを行なった。

- ① 生活一般……食事は現地食を抵抗なく食べた。現地人家庭に1ヵ月間入り生活したが居住状態は大変よかった。
- ② 言葉……訓練所において現地人教師から授業を受けたので気分的に現地の人との会話に抵抗なく入ることができた。専門分野・その他、こみ入った話になると会話にゆき詰まり、日々の勉強不足を痛切に感じた。

II この1年を振り返っての業務報告(1974年12月提出の中間報告書より)

1. 任務内容

エル・サルヴァドル国立芸術高校美術部陶芸科学生の教育と指導。

2. 業務状況と反省

- (1) 着任は1973年の学年末で、1ヵ月間、前任者との業務引き継ぎを行ない、12月から翌年2月15日から始まる仕事場の改造・原料のリスト作成・原料調査を行なう。

- (2) 授業は、2月15日—6月20日 前期
6月20日—10月19日 後期
9月初旬より、10月15日まで卒業制作(10月19日提出)
で、月曜日～金曜日の毎日午後2:00～6:30までである。

土曜日は終日、校外授業として原料地・陶業地見学を行なった。

- (3) 学生は今期は男子1名だけであった Bacherato Artes (以下、B・Aと略す)。

- (4) 陶芸学科では、芸術高校の生徒の他、以下に記すような「陶芸教室」を開いている。

- | | | |
|-----------------------------|---|-------|
| 1) Escuela Libre I (成人学級1年) | { | 男子 2名 |
| | | 女子 2名 |
| 〃 〃 II (〃 2年) | { | 男子 3名 |
| | | 女子 3名 |
| 〃 〃 III (〃 3年) | | 該当者なし |

(以下、E・Lと略す)

- 2) Escuela Niño (子供学級) 男・女 30～40名

(以下、E・Nと略す)

- 3) Escuela de Vocaconal (工芸学校美術専攻) 男子 8名
(2年の委託学生) 女子 15名

(以下、E・Vと略す)

国立芸術高校での陶芸指導

(5) 陶芸科における現地スタッフについて。

- 1) 陶芸主任 アルバロ・クウェスタ (1971年度卒業生) 23歳…
…今年、日本へ留学
- 2) 助手 カルロス・チェット (1971年度卒業生) 24歳…
…今年イタリアへ留学、1ヵ年の予定
- 3) ノルマ・コルネホ (1972年度卒業生) 21歳
- 4) グアダルペ・ボニージャ (1972年度卒業生) 20歳
- 5) ベティー (1972年度卒業生)
- 6) オスカル (1973年以来助手補) 16歳

の6名である。そして、各学級を①田村、アルバロでB・Aを、②田村、アルバロ、ノルマ、オスカルでE・L I、E・L IIを、③グアダルペ、ベティでE・Nを担当した。

(6) B・Aのカリキュラムについては私が原案をつくり、アルバロと相談のうえ決定した。卒業制作の課題についても、そのカリキュラムに従って、アルバロと相談のうえ文部省に提出し、前年度のものよりも内容をきびしくした。

そのカリキュラムの詳細を以下に記してみた。

- 1) 理論 ①陶芸原料について
②釉について (化学組成、釉式)
③窯について
- 2) 実技 ①原土採集・土の精製
②土ねり
③道具づくり
④手びねり
⑤石脊型<凹・凸型、流し込み>
⑥ロクロ成形<高さ12cm、直径7cmの筒。直径12cmの皿>
⑦自由制作
- 3) 陶業地見学と、その研究 (レポート作成)

以上の3本柱から成り、各学級は次のように消化した。

- B・A
- 1) ①, ②
 - 2) ①~⑥

- 3) 見学, 研究レポート
- E・L I 2) ①～⑤
- 3) 見学
- E・L II 1) ①, ②
- 2) ①～⑦
- 3) 見学
- E・N 粘土遊び ・動物づくり ・貯金箱
 ・鈴 ・乗り物

以上であった。

(7) 1 ヶ年を通してみて

- 1) 前任者の中谷氏が在任中、仕事場の基本的な準備から袖染試験までいろいろと幅広く手をつけられていたので、私としては前任者の仕事を充分引き継ぎ、より一層の充実を目ざすということに重点を置いて指導してきた。ただ仕事場の充実という意味における高火度用の窯の設置は予算上の目どがつかず、実現できなかった。私の力が足らなかったことを今、反省している。
- 2) そして、全体的に私の仕事がかうまくここまでできたのは、陶芸科は他の科に比べて助手の数が多く、アルパロ、チエット、オスカルらの業務に忠実で優秀なスタッフに囲まれて活動できたからである。芸術高校の専攻生は1名であったので充分指導がゆき届いたと思う。その学生自身も優秀で、短期間の指導の中でよくカリキュラムを消化してくれた。この学生に対する学部長の評価も高いので、来年度から彼もまた助手として陶芸科に残ることになる。
- 3) 6名の助手のうち3名は女子であるが、陶芸科の草創期なので1名でも多くの男子の助手をもちたいと思っている。一般的に、こちらの人は華やかな目立った仕事ばかりをやりたがり、基礎的な勉強を好まないところがある。特に女子の助手にその傾向が強いからである。上記2)の学生の当学科への加担を歓迎したい。なお、当学科を卒業しても今のエル・サルヴァドル国の状況下では勉強を続けるところがない。また、彼の素質からしても、助手として当学科に残り、さらに勉強を続けられるのであれば、私としても、これ以上の嬉しいことはない。

4) 陶芸科部内の研究発表の場として、あるいは協力の成果として12月中旬、13日間の陶芸展覧会を開催したことには高い評価を受けたようである。また、上記とは別に、その1週間前に窯業地紹介およびその研究成果を発表する機会を得た。場所は国立図書館の1室をかりた。当国の窯業地の紹介及び近年次第に忘れ去られつつある生活用土器の展示は国立芸術高校の存在意義を高め、研究成果は人々の注目を集めた。

3. 将来の計画

(1) 当面、日本からきた高火度用焼成器材や展示会の成果などから、高火度用窯の構築のためのレンガ購入の見通しは明るい、学校側の決裁に関しては余断を許さない。

窯場用の小屋の材木が買い備えてあるので、来年から早速、建築に取りかかりたい意向である。この中に小さな試験窯を作り、安定した高火度用窯による釉の試験を続け、高火度焼成の陶器を作る基礎づくりに徹したい。

(2) 来年も学生の指導という面ではカリキュラムに大きな変化はないが、来年卒業予定の学生及び助手に対する技術指導はさらに強化するつもりである。

(3) 学部長と話し合った結果、私の後任隊員は必要としないということであった。ただ、現在日本に1ヵ年の予定で留学中のアルパロ君が研修を終えて帰国してのち、しばらく私と仕事を共にして引き継ぎを充分やって欲しいということであった。これは、この学校が芸術高校にすぎず、すでに芸術大学の構想が現実化し、開校にこぎつけているからであり、私の帰国後は充分、エル・サルヴァドル人の教師たちだけで陶芸科コースが運営できるからだと考えられる。上記アルパロ君との引き継ぎに関しては、双方、同時期に帰国、任期終了となるので、私の6ヵ月ないし1ヵ年の任期延長を学部長も望んでいる。

4. その他

(1) 人事と科内出費(予算)について

① 今後、陶芸科研究室の運営は学生の中から選抜した助手、そして教師等によって維持されるが、こうした選抜あるいは昇格等の人事の実権はすべて学部長ロベルト・ガリーシアが掌握している。

（前学部長はロベルト・ウェッソで、現在のガリーシアは今年《1974年》8月に就任したばかりだ）

学科内教師・助手の推薦が多少参考にされているようだが、どの学科も“助手抜擢のありかた”に不満を抱き、不信をもっているようである。人事に関してはすべて学部長の胸算用というところか。我々協力隊員仲間（他の科にも協力隊員がいる）でも話題になるが、こと人事に関しては口出しをしない方が良いとの判断で、表立った行動はとらなかった。

- ② 科内出費は今年（1974年）の年末に搬入予定の200個の耐火レンガの購入費と窯小屋の材料及び施設費が主なものであるが、合計400米ドルぐらゐの出費となる。年間科内総出費は展示会における作品の即売及び成人学級の学生から集めた材料費名目の1人当たり年間4ドルの小口収入によって、賄われた。

(2) 入学試験に思う

当学校への入学試験は1月初旬、当国の3大都市（サンタ・アナ、サン・ミゲル、サン・サルヴァドル）で行なわれた。おおよそ2倍ほどの受験倍率であった。私は、はじめ、その試験内容（学科・実技）の程度の低さと受験生の実技の未熟さ故、試験による選抜を危ぶんだが、学校側は身上調書と面接により、本人の美術に対する興味や熱意に重点をおいて選抜していると聞き、現状では無理からぬことと納得した。小・中学校では美術教育がゆき届いておらず、一般でも宗教祭にちなんだイラスト等の模写をしているだけで、実に美術教育の面では遅れた国だからである。

こうした点では初等教育における美術教育の早期実施と充実が急がれる。また一般にも美術に関心のある人であれば、たやすく取り組める機会を与え、門戸を広く開放すべきであろう。

当校では、ここサン・サルヴァドル出身の生徒が半分以上を占めているが、入学後の生徒の成績は総体的に地方出身の学生の方が優秀のようである。これは地方の学生は入学時からいろいろと勉学の障害になるものを自力で解決し、苦難を乗り越えてきているので、それだけ“やる気”をもっている学生が多いという事実と一致している。

来年の入学試験は、野町氏を中心に杉浦、田村3人の意見を盛り

国立芸術高校での陶芸指導

送った試験内容となるよう、試験問題を学部長に提出することにして
いるが、それ以上に大切なことは、芸術高校の存在を広く世間に啓蒙
し、熱意のある学生を1人でも多く募ることだと思ふ。

Ⅲ 協力活動についての私見とアルバロの帰国

(1975年10月14日の定期報告書より)

1. 任務内容の追加

自由学級・幼児学級、国立工芸学校(2年生を対象とした)陶芸指導
一般。

2. 業務の進捗状況

1) 専科生の指導について

今年は4名の男子生徒の指導に当たったが、うち1名が7月に基礎
教養科目の単位不足により学校を中途退学した。そして今月24日の学
年末テストで、さらに1名が出席不足により卒業規定にひっかりそ
うである。このように生徒のうち半数が完走できないという状況を生
じさせた原因は、自分が教師として生徒に学習意欲を起こさせるとい
う初歩的段階での指導を充分行なわなかったためと自戒している。実
技・理論等の一面をとってみれば、高校のレベルとしては充分指導で
きたし、生徒の理解力もかなりあった。単に技術指導を行なうだけな
ら簡単であるが、早熟で自尊心の強い中米の高校生が対象であるとい
うことに充分注意し、生徒の態度とそれを取り巻く環境に深い理解と
教育的配慮がなければ、指導も空まわりをしてしまうようである。

幾度か生徒と感情的なこじれを生じ、それが原因となって教師と生
徒とのコミュニケーションが充分行なわれない状態のまま卒業制作に
入ってしまったことは非常に残念であった。

2) 築炉及びフリット窯試験等について

高火度用の築炉作業は、まだ進行していない。学校側が学年末の卒
業制作のため、その材料購入に金をつかい、文部省からは充分な年度末
追加予算がおりていないので、最後の基礎土台準備ができないからで
ある。しかし相手側から充分資金を引き出すという意味で展覧会の審
査をすることによって得られる文部省の別ルートからの礼金が今月末
には出る予定なので、それと、協力隊の支援経費で、最終的準備を行

なうつもりである。11月になると生徒・助手も休みになり、時間がとれるのを利用して工事を始めたいと思っている。高火度の土・釉の試験は、電気炉・試験炉など日本からもってきたパーナーで行なっており、成果をあげている。また、学校で初めて、フリットを作り、フリットについての説明を行なって指導を試みた。この国の陶芸地の全部がまだ鉛を使用しているが、有毒なのを知っているので、安全性という点で助手・学校長からも注目された。

- 3) 専科生の授業の一部で実施しているエル・サルヴァドル国の陶業地見学も今年で3年目になり、完全に根づいたものとなった。単なる見学から、調査・分析を行なうというところまで発展している。たとえば、サント・ドミンゴ、デ・グスマン、ラスミナス、ワタヒアグアという所は、陶芸専科の学生だけでなく、3年生・2年生も加えて総計50名が文部省から大型バスを出してもらい、その地域の民族学的・社会的な面からも調査を行なった。そしてその集約として7月にミスユニバースコンテストが当国で開かれた折、観光局とのタイアップもあって当国初の工芸見本市が、国際見本市会場で行なわれたのである。

これをみるに、単なる『外』からの援助だけでなく、『内』にあるものを発掘し、それに『外』の我々がスポットライトをあてることによって、開発途上国の中にあつて、かつ先進国ではあたりまえとなっているものでも、彼らの強い民族意識を目覚めさせ、その『内』なるものの現地側での育成発展の具体策が、きわめて急速に進められる。

『外』からの文化移植を行なうことは文化ショックという面からいえば、必要なこともあるが、当の文化はなかなか根づきにくい。それよりも、現地側のニーズを充分調査して、そこにスポットライトをあてて、その後は現地側の自助努力に待たう方がよい。この『内』なるものの調査にあたっては、一般に開発途上国に強く存在する民族意識を、1つの大きな土台とすることが、良きにつけ悪きにつけ必要だと思ふ。

3. カウンターパート

現在陶芸科は、日本留学から帰国したアルバロ・クウェスタを長に、オスカル(助手)、オランヘル(6月から3ヵ月間エル・サル代表として当国の工芸紹介・陶芸家訪問等の目的でエクアドル国へ行ってきた)

の男子3名と女子のフルマとグアダルベの2名。女子の2名のうち1名ないし2名は、来年には人員整理の対象になり、外へ出る予定。なぜならば、今年の11月から始まる国際協力事業団の研修員としてパチェラートの自由学級卒業生を日本に出し、来年12月末帰国時には陶芸科の専任教師として働かせることになっている。教師数が増えすぎる現状があるが、陶芸科は毎年1名は優秀な生徒がおり、学校長も助手として残すことを決めることはないと思う。ただ女子の教師は最近質的に学生に追いこされつつあるので、長たるアルバロは女子職員の人員整理を計画している。すでに女子の助手の1人であったベティは現在、国立博物館で働いている。

4. アルバロの帰国

日本での研修を終えて帰国したアルバロは、「国際協力事業団の名古屋研修は、金沢のフェルマン・バルモーレの教育的修学と異なり、ここでは工業化と結びつく形で指導・教授されていた。これは私の目的であるパチェラートに対する陶芸術指導という点からいうと少々ずれるが、実際的な新技術を吸収するためには大変勉強になった。また研修期間も1ヵ年と規定され短期ではあるが、内容が充実していて良かった」と、日本留学の感想を述べている。

日本でアルバロは陶器産業地を見学したり、大学を訪問したりして、日本の陶器分野の底辺の広さに大変感心して帰国したようだ。そして「当国（ニル・サルヴァドル）の学校で芸術、芸術と騒ぐ前に、日本のように十分な陶器産業があり、かつ、その中で陶芸家も活躍しているといった姿が望ましい。国家の経済的発展という意味からも我が国の陶器産業の育成に力を入れるべきだ」と強調した。私もこの辺を重視して、今回の国際協力事業団ベースの研修員の選考にあたった。

ニクアドル留学から帰国したオランヘルは現在、国立博物館において民族工芸の調査にあたっているが、本人も不満らしいので、陶芸科主任のアルバロはオランヘルを当国の陶芸事情調査のチーフとして講座をもたせつつ、マヤ陶器の調査・研究にまでタッチさせたいとの意向である。

IV (付) 陶芸研修についての感想

(1975年12月 名古屋出張報告書より)

私は11月17日に帰国したが、帰国前すでに中米のエル・サルヴァドルとホンデュラスからの国際協力事業団ベースの陶芸研修員各1名ずつが日本に到着していた。また50年度のエル・サルヴァドルの研修員ホセが12月初旬には研修を終え帰国することになっていた。こうした状況下、協力隊事務局の鶴巻職員から、「名古屋研修センターに出向いてホセにエル・サルヴァドルの窯づくりの要領を伝え、私のあとの業務引き継ぎと、新研修員2名に対する技術指導を行え」との命を受け、11月26日から30日まで名古屋に出張した。この報告は彼ら陶芸研修員の日本における研修内容と若干の私の感想を述べたものである。

1. まず、すでにエル・サルヴァドルへ帰国している初回研修員のアルバロと今回帰国予定の2回生のホセの2人の研修員を推薦した私の選考理由と彼らの研修に対する私の感想を若干述べてみたい。またセンターの研修課長、コース担当者、語学講師等から聞いた彼らの研修態度など、それぞれ感想という形で記してみた。

(1) アルバロの場合

1) 選考理由：彼は芸術高校陶芸科の第1期卒業生である。卒業後、アメリカンピースコーと中谷前隊員のもとで助手をつとめた。陶芸の基礎知識は充分であり、総じて造形美術の才能もある。仕事に対しては努力型で英語の語学力はないが一時、日本語のクラスに通って勉強していたので、まず日本での研修に支障をきたすことはないと判断した。

2) 本人の感想：日本の窯業事情は、陶芸家といわれる美術工芸制作家から、産業としての量産陶器生産業に至るまで、陶芸を内包するこの分野の幅が広く、美術家と生産業者とのバランスがうまくとれている。研修期間は、その研修目的からすれば短い。内容的には充実していた。ただ私の場合、この間のコースが、いわゆる陶芸家のものというより、陶器製造者のためのものなので、私向きの研修とは言い難かった。個人研修で瀬戸窯業高校に行けたのは、上記を補ううえで有意義であった。

(2) ホセの場合

1) 選考理由：彼は芸術高校卒ではない。自由学級で2年間学んだあと、一時、エル・サル陶業地の1つ、インサフィで陶芸のクラスを受け持ち、教えていた。その後、陶器工場を作って、経営していた。彼は文部省関係の人ではないので、彼を研修員として日本に出すについては、いろいろな問題があった。陶芸に関する知識・技術では、前のアルバロより劣るが、陶器工場経営の経験があるという経歴と日本での研修内容が合致しているという点では適当であるとの判断を下した。

2) 本人の感想：日本語はまだ不自由を痛感する。研修システムは実に合理的だ。集団研修は内容が幼稚で、私としてはもっと高度な技術について勉強したかった。

個人研修になってからやっと研究らしいことができたように思う。また研修期間を延長して三重、瀬戸へ行った。ここでの研修期間中、周りの人々は大変親切で、細かな指導をしてくれたので研修内容はよく理解できた。日本での研修の結果から、私は陶土の原料分析に非常に興味を抱いた。今後、自国に戻ったらX線分析器を購入し、エル・サル国内の陶土の原料分析を行いたい。

(3) 上記2人の研修員に対する研修センター側の感想

かつての陶業研修員はだいたい大学出か英語のできる人が大半であった。上記2人については、両者とも英語の語学力は他国の研修員に劣り、だいぶ苦労していたようである。しかし、研修態度は両者とも大変まじめで、研修内容を懸命に吸収しようと努力していた。センターとしては、1、2の研修員の態度から、その国情を判断することはしないという不文律があるが、彼ら2人の姿を見て、中米の国々に好印象をもった。

2. 次に本年度(1975年)のエル・サルヴァドル、ホンデュラス各1名、計2名の女性研修員の選考理由と、彼女たちの日本での研修に対する抱負及び私の感想を述べてみた。

(1) グアダルベ(エル・サルヴァドル)の場合

1) 選考理由：私は彼女の選考には一切タッチしなかった。すべて現地サイドで行なわれた。彼女は芸術高校卒業後、青少年スポーツセ

ンターで美術一般のアシスタントをやり、その後、再び学校にもどり、子供絵画教室のアシスタントをやっていたという経歴をもっている。

2) 本人の研修に対する抱負：①6～8番のマットを中心とした釉調合の要領，②土の化学分析とその調査，③小・中学校の美術授業の参観と研究，④研修終了後2～3ヵ月，陶芸を個人的に勉強したい希望がある。

3) 私の感想：彼女は陶芸科卒業後、主に美術教育一般に従事していた。陶芸の基礎知識も不十分なうえ、研修項目が多すぎる。目標をしばるように、との私の意見も受け入れられなかったようだ。かりに、集団研修の初期講習段階で、その結果がおもしろくない場合は、センター側で思い切って彼女の主に歩んできた美術教育一般に切り替えさせた方が、エル・サルヴァドル国が現在必要としている人材養成にも合致し、帰国後の彼女にとっても、いいのではないかと思う。

(2) イサベル（ホンデュラス）の場合

1) 選考理由：ホンデュラス国の工芸学校・陶芸科から協力隊員派遣の要請が出ていたので、今年(1975年)8月ホンデュラス国へ出張し、調査することになった。ホンデュラスの学校は、エル・サルヴァドルが美術学校であるのに対して、いわば職業訓練所である。この訓練所は産業振興のための技術者訓練機関として重要な位置にある。特に陶器産業の振興にはその訓練設備の充実とともに国が力を入れている。したがって日本での研修内容は、この国にとっては恰好のものであり、学んだ知識や技術はすぐにでもホンデュラスの国のために役立つであろう。そこで、協力隊員が現地へ派遣される前に、日本へ研修員を送ることにした。彼女は2年制の陶芸科卒業後、2ヵ年外国に留学した。その後、この工芸学校の陶芸科主任として教鞭をとっている。陶芸に関する基礎知識もまあまあである。性格的にはアタマの強さを少し残しているが、真面目で、読書家である。

2) 本人の抱負：①原料分析の研究，②焼成後の釉の耐熱・膨張の研究，③多種の釉薬の調整と施釉。

3) 私の感想：ホンデュラスは原料に恵まれた国なので、精度の高い原料分析を行なえる人材の養成が必要である。本人の興味もこの辺

にあるようだ。⑨については、現工芸学校の状況から、学校がどこまで機械を入れ得るかを見定めて取り組めば、そう難しい問題ではないように思う。

3. 私のみた『研修員制度』

中米の国々では「日本は陶業分野では世界の最先進国」と理解されている。陶芸を勉強している者にとっては、日本へ『留学』することが最大の希望であり、日本へ行けることが決まれば、実に運の良い幸福なこととして受けとめられる。その他、公的な立場で『日本へ行って勉強する』ことは研修期間・内容に関係なく、帰国すれば『箔』が付き『地位』は上がり、給与も1.5倍から2倍にはね上がる。帰国後の内情は別にしても、本当に知識・技術を欲している者は「1年では短い」と訴え、「見て帰ってくるだけでは研修に値しない」と考えている。そして、機会があれば、再度日本へ行って、技術習得のため、さらに勉強したいと思っている熱心な人も多い。

私の体験からいっても、上記のように日本を見かじって帰ってきた現地人のいるところでの技術援助には多少のやりにくさはあるものの、彼らとうまくコミュニケーションができれば、プロジェクトの進め方が一層楽になり、研修の効果の一面ともいえる。

中米の人々は自尊心が強いが、私のみるところ「何か教わる」という点では、現地において教わる時より、『陶業の本山』日本において教わる時のほうが、その態度は実に謙虚だ。研修センターの語学講師の談だが、中米の人々は語学は弱い、まじめで努力する人が多いという評は、まさに上記のことを裏付けているかのようだ。

国際協力事業団及びエル・サルヴァドル国双方の選定事項に該当する人を選考するのは、なかなか難しい。私としては、なにか特長のある人を基調に推薦してきたが、基本的には現地で指導的立場にある人、あるいは経験の豊富な人を選んだ。

各研修員には、研修期間が短いので研修目標をしぼるよう注意してきた。結論するにはまだ早い、これら3名の私の選考には、彼らのことを研修センターで聞いた限りでは誤りのなかったことを確認した。

最後に、今後のエル・サルヴァドル、ホンデュラス両国からの研修員受け入れについて述べてみたい。

まずエル・サルヴァドルについては、ここ2～3年は、美術高校ベースでは、その要員はいないと思う。現地側が選考や人事のシステムを変える必要がある。ここしばらくは、それらの解決を彼ら自らの手にゆだねるべきだと考える。

次にホンデュラスについては、設備は比較的整っているのだが、技術をもつ人材が不十分だ。したがって、日本でキメ細かい研修を実施すれば大変有効に同国の陶業振興に寄与できると思う。しばらくの間は、要員の基礎知識や語学力等に問題があるといえるが、『特長のある人』が多いので、研修の成果はあがると期待できる。

そして、できることなら、2～3年後にはホンデュラスとエル・サルヴァドルの両国の研修員候補者から作品を提出させ、共通審査の結果、優秀者を研修員とするようなシステムを考えては、どうであろうか。

また、名古屋研修センターのコース担当者から、①タイル、②耐火物、③釉薬、④その他の4つの短期コースがあることを聞いた。中米の人々は、自己流に解釈する能力に長けている。しかも公的にしぼられて仕事をするより、資金面のメドさえつけば自立して自由にやりたい、という傾向がある。だから、日本で研修一般コースを終えた人々に対して「帰国後は5年間、公的機関に奉職する」との誓約をとったうえで、再び日本で上記短期コースの研修を受けることができるよう便宜をはかっては、どうであろうか。

日本に帰って考えること

田 村 英 世

私は48年10月、造形美術の隊員としてエル・サルヴァドルに赴き、3ヵ年の任期を終えて51年帰国した。私の3ヵ年の体験を話すたびに、聞き手は「それは良い経験でしたね」という言葉を返してくる。この言葉に私の胸のうちには少々複雑である。なぜなら、人は私のこの3ヵ年を過去のことと片付けても、私には、現在の生活も過去の延長線上にあるという強い意識があるからだ。48年10月は、現在まで通算7年にわたる私とエル・サルヴァドルとの出会いの書き出しであり、51年はその句読点にすぎない。

報告書の内容的には不十分な部分があり、若干まともにも欠けるとの反省も残るが、この3ヵ年で、赴任当初考えた目標はほとんど達成できたと自負している。ただ、最後の時期に、私の未熟さから、現地の人々との間に感情のゆき違いが生じてしまったことは残念であった。敢えて私の未熟さからと書いた理由は、けっして私自身の技術上のことではなく、私の一方的判断に起因するものである。つまり、人は食物を食べる時、栄養・消化のことまで考えて食べるわけではなく、発育状態に従って、吸収される物は吸収され、排泄されるものは排泄される。私は彼らにとって必須栄養と思われる物を優先して供与してきた。私は発展途上国の明日に伸びる力、彼らのタフな胃腸を信じたのだ。彼らの発育状況を観察する余裕をもち得なかったため、彼らは消化不良を起こし、彼らとの摩擦は避けられない結果となったのである。

49年12月提出の報告書に活動方針を次のように書いた。1、陶芸基礎理論、2、実技＝①成形、②焼成、③見学。前任者、中谷氏との引き継ぎ内容を充分、考慮したものである。たとえば中谷氏は「高火度による焼成」、「陶業地見学」を2本柱として、造形美術の教育に当たっていたので、上記のごとく私の活動方針の中核を構成するものとして取り上げた。

①高火度焼成：低火度焼成中心の陶業では金属鉛を用いるため毒性があり、原料及び薬品は輸入しなければならない。その点、高温度で焼成すれば器物も強く、原材料の現地調達範囲が拡大するので有利であると考えた。

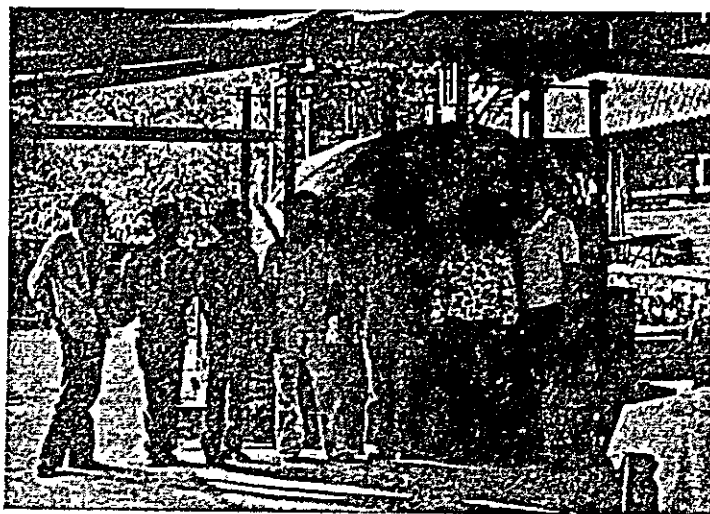
◎陶業地見学：生徒たちが自国の陶業地の実情を把握し、「テクニカル・ルーツ」としての意識を彼らのなかに培うことは今後、彼らが陶業分野で何らかを展開していく上で不可欠な「メトロ・ノーム」となり得ると考えた。その土器づくりは何の機具も用いず、家の土間で土が練られ、2、3本のへらだけで美しい形が生まれ、そして庭先で静かに焼かれる。極めて素朴で、陶器産業の礎を見る思いであったし、私の中では機具等を外から現地へ持ち込むという行為に対する免罪符として、この現地の土器づくりに『共感』する気持ちは一層深まっていた。

帰国が近づいた時点では、JICAを通じて4名の留学生を送り出し、焼成設備を整え、土器については努力が登って現地側での展開もみられ、赴任当初掲げた目標は一応達成できた。しかし前述した感情のゆき違いから、現地側からは誰一人見送りのないさびしい帰国となった。

帰国後、エル・サルヴァドルから持ち帰った土器資料を整理し、母校において、「土器展・講演会」を行ない好評を得た。54年4月から、千葉県の高等学校の芸術科の一員として奉職する機会を得た。本県は「猿きもの」の原点ともいうべき縄文土器そしてそのエポック的な「加曾利」、「堀の内」と呼ばれるものを出土した所である。今年の文化祭では生徒たちとともに県下の博物館、郷土資料館の指導を仰いで、「縄文土器」という表題で研究発表を行ない、同じ会場に中米で収集した土器に関する様々の資料を出展して比較展示を行なった。これらは少なくとも私のエル・サルヴァドルに馳せる秘めた思いであり、今も私の心の底流として流れている。



芸術高校。石膏型の実習



51年9月、祭壇によるニル・サルヴァドル初の陶芸用高火度炉の火入れ式の折、現地のスタッフとともに



母校玉川大学における土器展。隊員OB、およびJICAを通じて日本にきているエル・サルヴァドルの研修員たちとともに

田村隊員の報告書を読んで

新 川 昭 一

報告いただいたエル・サルヴァドルの美術（アートアンドクラフト）教育における陶芸の指導には、多くの苦勞があったことと思います。大変な努力で着々と成果をあげていることに、心から敬意を表し、一層の充実発展に、大きな期待を寄せるものです。

陶芸は、あらためて述べるまでもなく、火と土による芸術です。小手先の細工に走りすぎることなく、本質に迫る研修を進めて欲しいと思います。

指導内容の研究については、遠い地で不便なことが多いでしょうが、創意工夫をこらして、その地でなくてはできない楽しみや喜びをみつけられたら、すばらしいと思います。言葉が通じ合わない異国の人々と、美術を通して知りあえることは、ありがたいことです。そして、日本という国のことを美術の面から知ってくれる人々ができることも、非常にうれしいことです。作品づくりは人柄づくりということを頭において、一層魅力的指導を進めてください。お元気で、お願いします。（協力隊技術専門委員）

バレーボールの指導にあたって

（中間報告書（昭和51年2月7日）
派遣国 エル・サルヴァドル 49年1次後期組
職 種 体育（バレーボール）
氏 名 太 田 清 隆
配 属 先 文 部 省 青 少 年 ス ポ ー ツ セ ン タ ー
サン・サルヴァドル

太田隊員の略歴

氏 名 太 田 清 隆
生年月日 昭和26年10月27日
出身 県 宮 城 県
職 種 体 育（バレーボール）
派遣期間 49年10月～51年10月

I 任務内容

エル・サルヴァドル国文部省の要請により、青少年スポーツセンターにおいてバレーボールの指導・普及にあたる。また、前任者の立石隊員（バレーボール）に引き続き、エル・サルヴァドル国バレーボール協会への協力をする。

II 業務の進行状況と反省

前回の報告書には、各地方の青少年センターの状況、前々回には、私の業務の全般的内容を報告したので、それらに照らし、この報告書では、どのような活動をしたか、その他を、項目別に報告する。

1. 青少年スポーツセンター（エル・サルヴァドル市）

週3回、午前中に開講した小学生バレーボール教室は7月まで続けられたが、私が地方の青少年センターを巡回指導中は休講にした。エル・サルヴァドルに帰ってみると、降雨により、スポーツセンターの上方で工事中の公園の土砂がバレーボールコートへ数回にわたって流れ込み（20cmから数十cm）、小学生バレーボールはもとより、その他のクラブの練習も、コートを転々と変えながら行なわなければならなかった。事務所に、整地してくれるよう依頼したのだが、新しい年を迎えても、まだ整地されておらず、困っている。しかし、サッカーコートの端にバレーボールコートを1面とって、なんとかやっていくつもりである。

ここ2～3ヵ月の間は、この状態で練習を続け、公園の工事が終わり次第、工事関係者の手で整地されることになっている。

さて、私が巡回指導中は助手をつけてもらった。彼がエル・サルヴァドルのセンターで指導していたのであるが、事情があって辞めてしまった。そのうえ、生徒は年末年始休み前の試験（卒業・進級）のために、練習にこれなくなり、一応休部という形となった。

その他、夜間に行なった講習会について報告すると、受講生がほとんどセンターの寮生（地方から勉学にきている学生）で、彼らの試験前まで講習会を続けたが、最終的には4人残っただけで所期の目的を達することができなかった。その理由は、夜間はルールの説明が中心となり、土曜日に実施した実技には、受講生が地方の家へ帰ったりして欠席がち

になる（講習会の進行状況に大いに影響がある）ため、結局、閉講し、次回に延ばして再度開講することにした。

全体的に、当センターにおける私の仕事は失敗だった、というより、何の成果も得られなかったといえる。それは、これから述べるオリンピック委員会（バレーボール協会）への協力と私自身の力不足、さらに後述するが、私のエル・サルグェドルにおけるバレーボールの普及と強化に対する考え方、などからくるものだと思う。

しかし、当センターにおける私の仕事に、成果らしい成果がなかったにせよ、今後の私のやり方次第で、再び立ち上がれるものと確信している。事務局側の協力・支援を期待する次第である。

2. オリンピック委員会（バレーボール協会）

協会に対する協力活動は、男・女ナショナルチームの指導（男子チームは監督）ということ、ある程度の成果が上がったと思っている。しかし強化面のレベルはまだ低く、バレーボール以前の問題にぶつかる。

その他、協会の大きな行事として、国内大会を年3回開催しているが、少しずつ参加チームも増えてきている。前回の大会（日本の国体にあたる）には、男子22チーム（うち1チームはJOCVのチーム）、女子7チームと、計30に近いチームが参加した。しかし、大会が長期にわたり、しかもゲームが夜間に行なわれるということもあって、まだ多くの問題を残している。それ以外にも、協会そのものの組織のあり方などにも問題がある。たとえば協会としての組織的活動がなされておらず、これからの協会のあるべき姿の明確化が求められているといえる。

このような状況のもとで1年間の協力活動では、成果らしい成果は得られていない。これが率直に言って現在の状態である。

3. 軍隊などのチームの指導

上記以外に、時間をみつけて、軍隊などのチームの指導もした。これらは「バレーボールの普及」という目的で行なったので、それなりに成果があったと考えている。それらのチームも大会に参加したので……。

4. カウンターパートについて

カウンターパートについては問題があり、前記のように途中で辞めてしまった。その理由の1つは青少年スポーツセンターの職員の手当の問題である。現地人バレーボール指導者（カウンターパート）の手当は、

バレーボールの指導にあたって

時間給3コロン(約250円)で、月にして84コロンの予算がカウンターパートのために計上されているだけである。もちろん、現地人指導者の力不足にも問題がある。

1例をあげよう。3人ほどの現地人をカウンターパートとしてディレクターに紹介した。そして「月に84コロンしか予算がない」とディレクターに説明したら、ディレクターは「考えてみます」と答えたが、2度と当センターには現われなかった。体育学校卒業生である、あるバレーボール指導者は月に1,000コロンを超える収入を得ているのだから、私としても無理に「カウンターパートになってくれ」とは頼めなかった。参考までに、専任の指導者は225コロン、時間給の指導者は75~90コロンだという。残念ながら青少年センターの給料システムはこのような状態である。

他の体育学校、美術学校、音楽学校の指導者は公務員の立場にいるが、青少年スポーツセンターについては、以上のことからわかるように、私が入り込めない大きな問題がある。

指導者の力不足という問題については、当センターで仕事をしているほとんどの指導者は体育学校を卒業しておらず、指導分野の一般的知識に欠けるところがある。そこで、かつての大峯隊員の生徒や私が最初に指導した生徒は、他の指導者の練習にはあまり参加しないという状況になってしまう。私が地方の指導から帰ってくると、チームがなくなっているような事態も起こる。また当センターでのクラブ活動は義務ではないので、嫌なら練習に参加しなくてもすむ。その辺にも問題はあるであろうが、バレーボールという面から考えると、指導者(カウンターパート)の養成とクラブ員の確保が不可欠だと思う。今年から方法を再検討してやってみるつもりである。

5. 携行機材の利用について

携行機材の利用は、ある程度うまくいっていると思うが、ボールが紛失したりするなど、管理面での問題がある。

また、携行機材の購送についても問題がある。いまさらいうまでもないが、送る前(商社からの納品時)に充分チェックを行なってほしい。品物の確認ばかりではなく、品物番号を確認してほしいものである。せっかく送ってもらったのに、使用できないものもあった。細かいことで

はあるが、事務局の善処を願う次第である。現在、1セットのネットとボールおよびボールが青少年スポーツセンターにある。ただし、使用可能なボールは数個にすぎない。

6. 総体的反省とエル・サルヴァドルにおけるバレーボールの指導・普及・強化に対する私の意見

私が着任当時(1974年11月)は、立石隊員が当国のナショナルチームを指導しており、私も青少年スポーツセンターでの仕事が終わってから、同チームの夜間指導の手伝いに行った。したがって、事実上、どうしても私の仕事のウエイトが、ナショナルチームの指導へとかけられることになった。そこで、私の『任務』と『協力』を、いかに両立させるかが問題となった。

センターでの仕事が午後からばかりなら問題はなかったが、地方での出張指導などとなると、ナショナルチームの練習から抜けなければならなかった。そうすると、ナショナルチームの選手でさえ、練習をさぼるようになる。それでも、一応、試合に見合っただけ練習計画を立てておいたので、あまり問題は多くなかったが、センター側からすれば、やはり不満もあったことは充分察せられる。しかし『効果的協力』を考えると、センターでのバレーボールだけにしばられたくなかった、というのが私の本音である。

そこで、『任務』と『協力』のあり方を考えざるを得なかった。もう少し現情を説明しよう。

私は大峯隊員の後任として着任した。当初私は、どのような目的で大峯隊員が青少年スポーツセンターに派遣されたのか、充分理解していたわけではない。それから立石隊員が体育学校で2年間指導した後、バレーボール協会の方の指導に切り替わった。その立石隊員も、私が着任して2~3ヵ月後に帰国し、エル・サルヴァドルには私だけが残った。

当時、青少年スポーツセンターは荒れ放題だったが、かつての大峯隊員の生徒も2、3人顔をみせたのをはじめ、学校が休みだったため多くの生徒が集まったが、学校が始まると半数以上の生徒がこなくなった。

さらに、受け入れ機関の状況にスポットを当ててみると、すべての青少年スポーツセンターで、計画だけが先に立ち、その実施は遅れがちであった。センターのスタッフたちも「この計画は実行できない状態にあ

る」とわかっていながら、立場上、計画案を提出し、それに甘んじているようである。その計画を実行するとなると、「金がない」ということになる。上司は「地方にもバレーボールクラブを作ってくれ」「普及させてくれ」というが、いくら上司の命令でも、これだけは私にはどうしようもない。もし本当に青少年スポーツセンターが、「日本人指導者がほしい」「バレーボールを普及したい」というのなら、それなりの受け入れ体制を整えなければならないと思う。

私としては「ボールもネットもポールも持ってきましたよ。バレーボールなら私と一緒にやれます。しかし、考えてみてください。私は地方のセンターを回っていますが、ベルリンを除く4センターでは十分に機材もあるんです。ただ、しっかりした指導者がいないんです。金がないんです。私が各地を巡回指導した時は、20人ぐらいの人びとが集まってきたバレーボールを楽しみました。しかし多分、もう今は練習していないでしょう。“石の上にも3年”と日本ではいわれていますが、ここでは、“石の上にも100年”ですね。だからといって、私は諦めているわけではありません。情熱は持ち続けています」といいたい。

と同時に、私の協力方法をもう一工夫すれば、青少年スポーツセンターにも、バレーボール協会にも、また、その他のバレーボールチームに対しても、大きく貢献できるのではないだろうかと思う。つまり、このような状況のもとで、私が青少年スポーツセンターに対して協力できることとして一番大切なのは、チーム指導よりもむしろ、各センターに良い指導者(カウンターパート)を紹介することだと思っている。そして文部省が職員に対する手当をもう少し改善し、指導者の充実に図るよう促すことだと考えている。“ニワトリが先か、タマゴが先か”といったことになるかもしれないが、努力してみるつもりである。もちろん、それ以外にも組織や体制についての疑問もあるが、せめて「良き指導者(カウンターパート)を」と考えている。

1年かかって得られたものは『結果』ばかりで、『成果』といえるほどのものはないが、1年間の活動の結果から、私なりの立場(ナショナルチーム監督など)を活かし、青少年スポーツセンターに対する協力活動をやっていきたいと思っている。そのためにも、センター内ばかりで仕事をするのはなく、他へも活動範囲を拡大したいと思う。

バレーボール協会に関しても、同様なことがいえる。まず、協会としてはどのような業務責任があるのか？ また、それを組織的に運営し、業務責任を遂行していくには、どのようにしなければならないのか？ をはっきりさせなくてはなるまい。この点が曖昧で、私自身、ナショナルチームの指導だけで終わったということに力不足を感じている。

会長はじめ役員たちも好意的に私の意見を聞いてくれるので、チーム指導に関しては協力はスムーズにいくが、やはり、具体的に、審判員や指導者不足をどのように解決していったらいいのか？ 普及は？ が課題である。

まして、来年は中米オリンピック大会がエル・サルヴァドルで開催されるので、審判員の育成は急務である。普及と強化を考えるなら、やはり指導者養成が大切であろう。それから、なんとかしてバレーボール用具の入手を容易にするよう工夫し、コートを増やしていかねばならないだろう。

協会の力不足は、組織力の弱さにもよるが、やはりバレーボールに対する無理解と目的意識の低さによるものと思われる。この国の国情やスポーツの歴史などに目を向けて考えれば、別の問題にもなるであろうが私は私なりに最善を尽して協力していきたいと思っている。

もちろん、嬉しいこともある。ママさんバレーボールがオリンピック委員会の企画で、週2回、国立体育館で行なわれていること、当国の軍隊内に独自のバレーボールに関する組織が誕生し、動き始めていること、などがあげられると思う。その他にも数えあげればいくつもあるが、ここでは省略する。

ともあれ、エル・サルヴァドルにバレーボールの指導者として派遣された私は、自ら多くの課題を背負い込み、私なりのプランで協力していくために、事務局に対して次のことを報告しなければならない。

私は過去1年あまりエル・サルヴァドルでバレーボールの指導にあたってきたが、この国では、単に、青少年スポーツセンターだけでなく、全体的に指導、協力してバレーボールの普及を図らなければならないと確信している。

そのためには、まず、当国政府の公式要請に基づく任務内容を改めるべきだと考える。私の任務に関して具体的にいえば、青少年スポーツセ

ンターを1つの職場とし、私の協力活動範囲を正式に拡大し、ある程度自由に機材を使用し、プランニングを行なって、仕事をしたいと思うのである。花田調整員との話し合いでは、「各ディレクターとの間で話がついていけば、格別問題はないだろう」との見解を得ている。

そこで私は、昨年、本年の協力活動プランを作成する段階で各ディレクターの承認を得、私のプランに関する説明と意見を述べておいた。もう少し補足すると、現在までは青少年スポーツセンターが私の職場で、その他の機関での指導は、あくまでも『協力』であって、私の正式任務とは考えていなかったが、今後は私の任務の1つとして協力していきたいと考えている。残念ながら、まだエル・サルヴァドルにはバレーボールの専門的指導者がいないということから、多くの講習会を開くにあたって文部省とオリンピック委員会がタイアップした形をとれば、より効果的だと思う。そうすれば会場の問題もある程度は解決されるし、受講者にとって馴染みやすいものになると思う。エル・サルヴァドルは小さな国であるうえに、バレーボールはまだ新しいスポーツの1つであるのだから。

これらの理由により、私は文部省（青少年スポーツセンター）とオリンピック委員会（バレーボール協会）での活動とを兼ねたいと思っている。私の正式任務として事務局でも取り扱ってほしいと思う。任務内容は昨年とほとんど変わらないのだから、『正式』になることによって、私自身の心の負担を除きたいのである。

それから、もう1つの大きな理由として、1977年の中米オリンピックに備えて総合体育館が建設されるのを機会にオリンピック委員会から、バレーボール関係の施設に関する指導を依頼された。床はすべてバレーボールに使用するとの見解が示されているが、体操も加わると思われるので、体操の門間隊員とともに、体育館の床に関する指導をしている。この件については、後日、詳しく報告するが、オリンピックを成功させるためには、チームの強化はむろんのこと、観客の動員も必要である。オリンピックの観客となり、将来は大会の選手となるべき生徒に本日からバレーボールの指導を始めねばならない。私の正式任務に関する検討をお願いする次第である。

その他に、体育学校で今年、体育教師の再教育を行なうことになって

いる。バレーボールも含まれているので、陰ながら協力したいと考え、昨年の11月から体育学校の教師（バレーボール担当）と一緒にテキストの作成（日本語テキストのスペイン語への翻訳）を行なっている。残念ながら、オリンピックや世界選手権大会が開催されたメキシコにも、スペイン語の適当なバレーボール指導書はなかった。私はメキシコのオリンピック委員会が開いた講習会を視察してきたが、プログラムはあったものの、テキストはなかったのである。そのため、指導者養成に最低限必要なテキストの作成を思い立ち、現在、その作業を進めている。この3月か4月には完成するものと思う。

以上は現在の活動状況と過去1年余の協力活動の反省の報告である。

Ⅲ 将来の予定

具体的には述べられないが、計画だけを簡単に記しておきたい。

1. 青少年スポーツセンターに対するプラン
 - A サン・サルヴァドル青少年スポーツセンター
 - イ、午後、クラブ活動の指導にあたる。
 - ロ、現地指導者（カウンターパート）を再び要請する。
 - ハ、指導者講習会を開講する。
 - ニ、当センターで生徒のくるのを待っているのではなく、外へ向けてセンターのPRをし、生徒数を増やす。
 - B サンタアナ、サンミゲル青少年スポーツセンター
 - イ、週末（金曜、土曜）の指導。
 - ロ、3ヵ月に1度、1週間の滞在指導をする。
 - ハ、学校休業期間（11月～1月）に1ヵ月間滞在し、オリンピック委員会との共催で指導者講習会を開き、修了証書を与える。
 - C その他の青少年スポーツセンター
 - イ、要請があれば指導に行く。
 - ロ、B一ハの指導者講習会に参加するよう呼びかける（ソソナテはサンタアナ、ウスルタンとベルリンはサンミゲルの講習会に参加）。
2. オリンピック委員会（バレーボール協会）に対するプラン
 - A 審判講習会開講。
 - 5月の予定。メキシコから講師を招待する。

- B 指導者講習会開講。
8月, 12月の2回。
 - C 総合体育館建設への指導, 協力。
イ, フロアの利用法。
ロ, フロアとそれに関する援助。
 - D 協会プランニングの指導と組織づくり。
イ, 国内大会の運営。
ロ, 地方大会の援助。
ハ, バレーボール教室等の充実。
 - E ナショナルチームの指導。
3. 体育局(体育学校, 国立高校)に対するプラン。
- A テキスト作成。
 - B 再教育期間中, 週1度, 夜間に, 有志教師とのゼミを設ける。
 - C 午前中, 国立高校(メネンデス)でバレーボール講師としてクラブの指導にあたる。
4. その他

軍隊から時々指導要請があるので, 彼らのプランと私のプランを照合し, 都合をつけて協力する。

以上を全体的に考えてみると, テキストづくりから始まり, 講習会を数多く開き, 指導者養成とその組織化と普及を図る一方で, 直接チームを指導し, その強化を図っていきたいと考えているわけである。このような事情から, 私は1977年の中米オリンピック大会まで任期を延長することを考え, ディレクターにその意向を伝えたところ, 承認を得たので, 後日任期延長の申請書類を提出することとしたい。

また, 以下は, まだ私の私案の域を出ないが, 私の後任隊員というより, もう1人バレーボール隊員(立石隊員の後任として)を早急にオリンピック委員会に派遣できないものであろうか。この件に関しては調整員には調整員の考えもあるであろうから, 私の仕事の実情などからめて調整員に相談し, オリンピック委員会の意向も打診してみるつもりである。私自身の後任隊員については, 改めて報告したい。

IV 相手側の協力

この国の実情に合った協力姿勢だと考え、私自身、割り切っている。

V 問題点

前述したので省略するが、1つ付言しておきたいことは、総合体育館のフロアが円形で、日本のように方形ではないので、関係者と利用法を打ち合わせているのだが、なんらの進展がない。

VI 健康管理

第2回健康診断(昨年9月)で初期肝炎と診断されたが、その後、栄養に留意し、仕事内容を調整してコンディションを整えた結果、体重も増え、現在のところ問題はない。

VII その他

現在、門間隊員と奥村隊員と私との3人で1軒屋を借りて共同生活をしている。毎日、白米が食べられるので少し腹が出てきた。しかし来週からは仕事が本格的になるので、その腹もすぐへこむものと思う。

VIII 昨年の試合結果

1. 青少年スポーツセンター

国内選手権3部 第7位(1勝6敗)

国体3部 第2位(16勝2敗)

2. ナショナルチーム

グアテマラ定期戦

エル・サルヴァドル	グアテマラ
1部男子	0—3
2部男子	2—0
1部女子	0—3
1部男子	0—3
◇	2—3
◇	3—2
◇	2—3
◇	2—3

〔評〕男子はかなり良くなってきているが、まだ、ここぞというところで点がとれない。女子は力の差がはっきりしている。

3. C. D. I. コスタ・リカ遠征

男子	3	(15-9, 15-12, 9-15, 15-10)	1
ク	2	(15-10, 15-8, 6-15, 8-15, 14-16)	3
女子	3		0
ク	3		0

〔評〕男子はまだ勝てるだろうが、女子は大変。

4. ナショナルチーム

第7回パンアメリカン大会（於：メキシコ）第7位

（注：記録は、この報告書集では割愛）

〔評〕このように大きな大会に参加したのは初めて。試合の様子はすべてテレビで放映された。

結果は実力相応といえる。バハマ国チームとの試合に勝った時は、選手たちと抱き合ってしまった。

追想と現在

太 田 清 隆

自分の青春を求め、遠くに尽きることのない輝きを示す何かを——と、青年海外協力隊員として異国エル・サルヴァドルへ赴任したのが、もう6年前になるうとしている現在（帰国して3年を迎えようとしている）、改めて赴任時代を振り返り、また現在の自分自身を考えてみると、やはり言葉では語り尽くせない多くのことがあるような気がする。

無我夢中になって、身体が異変(病気)を起こしているのにも気付かずに、バレーボールを指導していた自分、それにはいろいろ多くの問題があった。しかし、それらを総合視点からみた場合、それが私の生き方であり、1つの人生だったと思うのである。善悪は別にして、青春時代の特権（敢えて特権と言いたい）として精一杯目指す方向への全力疾走、そして、相容れない矛盾と問題を自分に与えられた課題として取り組む姿勢が、自分の人生観の延長として、やれるだけのことをやったという思いにつながっている。しかしやはり自分の非力さ、才能の無さと甘えを否定できるだけの自分ではなかったと反省する点も充分にあった。単なる自己満足は自分の内だけにとどめておくべきであって、主観はあくまで主観であり、客観的な捉え方を現実として認識することが大切だと思っている。そのような意味から私の中間報告書は客観的事実と意見で綴ったつもりである。

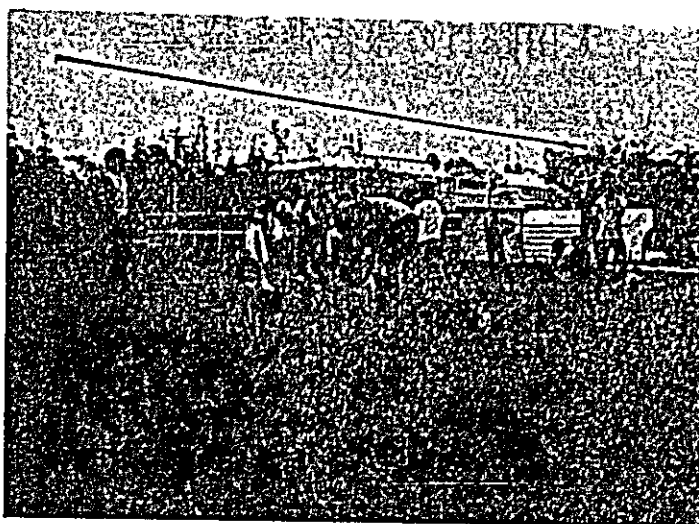
さて、当時のことを思い起こすと、反省する点は多くあるが、私の個人的な見解では、所期の目的を達成できたと思っている。言葉が喋れるようになるにつれて、仕事の内容も単なる肉体的作業（練習指導）から、プランニングなどオフィスワークをやるようになり、上司ともいろいろ相談して、より効果的な協力ができるようになったと思える。ただ、時にはお互いのゆきすぎで口論になり、マイナスとなった点もあった。調整員にとっては厄介な隊員だったろうと思う。

しかし、報告書には書かなかった私個人の主観的隊員時代の3年間（任期延長1年）は、協力隊員としての任務遂行の成功、不成功は別にして、私にとっては満たされた青春だったと思う。そのため、帰国してからの私は、以

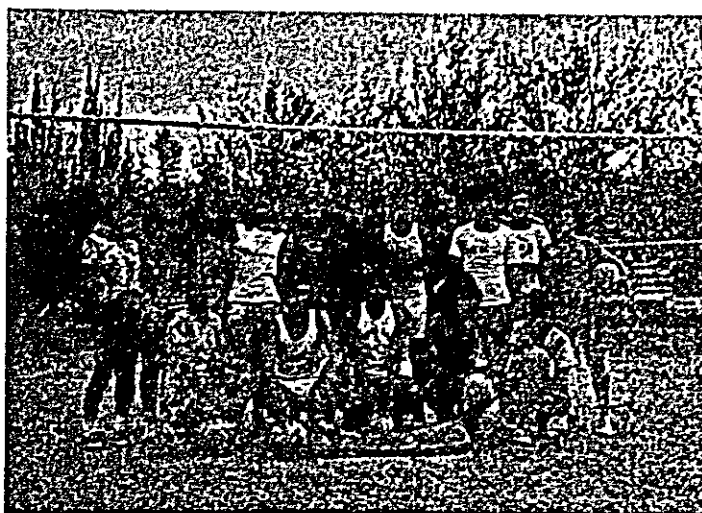
前の私自身とは違って、国内においては満たすことのできないある種のわだかまりと、冷めていく自分を再認識している。これではいけない、何のための協力隊であったのか、海外での生活を通して学んだことを、現在の生活の中にどのように生かしていったらいいのか、と今度は日本で試行錯誤している。今の私は過去の自分をセンチメンタルな追想で埋めるより現在をどう生きていくべきかに想いを馳せている。実は、私は、協力隊員として帰国後、専門家として再び1年、アルゼンチン国に赴任した（妻と同伴で）。そして、今年の3月末に帰国したのだが、その時、私は、これから自分の本当の生活が始まるのだという実感を胸に抱いて成田へ降りたったのである。

単に言葉で、協力隊は――、青春は――、人生は――、と、語るより、1つ1つを実践し、自分のものとして培い、あるべき方向へと前進するのが大切だろうと思っている。そのようなことから、私個人にとって、協力隊は自分で自分の青春を演出した人生のうちの1つの印象的シーンであり、そこで学んだものや経験したものを今後の自分の人生に活かしていかなければ、私にとって何のための協力隊であったのか、海外生活だったのか、と私の中で疑問として残ってしまう。過去の美しい幻想としてだけには決して終わらせたくないと思っている。

本題からはずれてしまったかもしれないが、私は協力隊時代の自分の報告書に触れて、以上述べてきたことが私の本音であり、今後の自分の生きる糧として、「1つの青春――私の協力隊での生活体験」を大切にしていきたいと思っている。



青少年スポーツセンターにおける練習ゲームの風景



青少年スポーツセンター・国立高等学校チーム「メネンデス」のメンバー

太田隊員の報告書を読んで

吉 村 恒 男

バレーボールの開発途上国への援助協力は、任務内容としてバレーボールの指導普及部門と選手強化部門の2本の柱を組み立て、その柱をきちんと確立させた上で仕事を進めていかないと、まとまりのないものになる。バレーボールで、その普及と強化は車の両輪になっているからである。

任地では、青少年スポーツセンターで教育的にバレーボールを普及すること、オリンピック委員会（バレーボール協会）では役員と協力してナショナルチームの選手強化を施策として行なったようだが、1人で2つの担当は相当負担がかかったことと思う。このような施策を遂行するためには、計画を綿密に立案して段階的に実施していくことが、成果をあげる大きな要素になり得る。

赴任時に、まず国内の実情を細かく分析して、任期中に重点的に実施しなければならぬ項目をあげ、目標をあまり高くもたずに、現場に見合った年間指導計画をしっかりと立てることだ。

普及面では、底辺の拡大が重要課題で、年間計画の中に国内巡回指導月間を設け、地方を巡回し、地元の役員と対話し、この地区で普及活動に必要なものは何か、また、それを推進していく上で障害になるのは何かを解明し、バレーボール愛好者の育成に努め、指導者を養成し、協会運営についても指導助言をしていくことが大切である。

国内を幾つかの地域に分け、そこに地域代表の指導責任者を置き、その代表を中心に定期的なバレーボール教室の開設と指導者養成講習会をもち、教室では基本技術の習得と応用技術の研修の場を提供すること、練習プログラムを組み、参加者には修了証を与え、感激の消えない時期に大会を企画し、その成果を発表させることが大切だ。指導者養成講習会では、教室の内容にある基本と応用技術を重点的に行ない、それに加えてバレーボールに必要な体力トレーニング、チーム練習計画の立案、コーチング理論、選手の健康管理と救急法にいたるまで系統的に教育し、適格者には、公認コーチのライセンスを与え、大会等の機会をとらえてコーチ研修会を開催し、資質の向上に

努めることである。

また、年に数回、地域代表の指導責任者連絡会をもち、地域活動の状況報告と今後の施策を検討し、協会運営の討論会をもち、協会活動の目的、組織、事業等についても理解を深め、協力態勢を整えることが必要だ。

普及活動で重要なことは、地域社会に対する奉仕であり、PR活動である。機会をとらえて技術映画やビデオの映写会、オリンピック、世界選手権、ワールドカップ等の映写会も企画し、バレーボール意識の高揚を図ること、また、国際大会を積極的に誘致し、良いゲームを実際に目で見せて大会の意義や会場での感激を味わわせることなどが必要である。幸い中米オリンピック大会が当地で開催されるとのこと、絶好の機会なので、これを契機に地域の末端までバレーボールのPR活動に努めることを望む。

選手強化面では、国際大会強化月間を設け、ナショナルチームの選手強化とコーチ養成、国際大会への積極的な参加を推進することだ。国内大会で良い成績をあげたチームの優秀な選手を中心にナショナルチームを編成し、選手には国の代表選手であることを自覚させ、選手の体力測定とバレーボールの素質を判定分析し、技術的なものと精神的な両面から指導を加え、国際大会を数多く経験させて強化を図ることである。

ナショナルチームの育成は、長期的展望に立って選手養成をしていかないと成功は望めない。長期・中期・短期路線を確立し、長期はエージグループ（小学生）を対象に、中期はジュニアチーム（中・高校生）を対象に、短期はナショナルチームのメンバーを対象とする強化計画を立て、それぞれの路線では、各段階に合った体力増強、技術の向上を目指し、総合して一貫した指導が必要となる。

また、各段階のコーチを集めてコーチ会議を開催し、選手の体力・技術、チーム力向上のシンポジウムを開き、計画的に選手養成をすることが大切だ。そしてコーチにはI・F主催のコーチ講習会に進んで参加させ、研修を積み重ねることが必要である。

以上のことを進めるについても、国のオリンピック委員会（バレーボール協会）との心の対話が重要で、隊員がもっている施策と協会がもっている施策を上手に協力合体させて、より効果のあがるものを求め、築きあげていくことが大切であろう。

日本の現状からみれば、バレーボールに対する意識の不足、施設用具の不

備、指導者不足、経費不足など、すべて不備不足の中で日夜努力を続けている
隊員の方々には頭がさがる思いだが、原点にかえって、バレーボールの指導
協力とは何かを考え、事業に邁進されることを望む。(協力隊技術専門委員)

国立高校(付属農場)で土壌学実験を担当

定期報告書(昭和50年11月30日)

派遣国 エル・サルヴァドル 49年2次前期組
職 種 土壌改良
氏 名 吉 元 清
配 属 先 文部省高等学校教育局,
チャラテナンゴ総合高等学校(農業科)
チャラテナンゴ

吉元隊員の略歴

氏 名 吉 元 清
生年月日 昭和25年7月25日
出身 県 沖縄県
職 種 土壌改良
派遣期間 50年2月～52年2月

I 任務内容

エル・サルヴァドル国、文部省高等学校教育局 (Ministerio de Educación, Departamento de Educación Media y Superior) の管理下にある国立チャラテナンゴ総合高校 (Instituto Nacional de Bachillerato Académico y Agrícola) の農業コースの教師というのが、私の派遣時の任務であった。学校で授業を受け持つとの話であったが、私の配属先は、国立高校の付属農場となっている。

3月10日エル・サルヴァドル着。運悪く、聖週間 (Semana Santa) を控え、1ヵ月間連絡所待機をしいられる恰好となった。時々文部省へ出かけて、仕事内容の検討や、あいさつ回りを行なった。仕事開始は4月の初め。完成してから2年目の比較的新しい、まだ未整備の農場で、そこに設けられた土壌学実験室の担当という任務が具体化した。土壌学とそれに関する計画書をもらい、これにそって授業を行なってくれとのことであった。対象は農業科の学生であるが、赴任時(4月12日チャラテナンゴ着)、農業科の学生は1年次110人、2年次75人、3年次45人の計230人。それに普通科を合わせると450人程度の大きな高校であった。中学生も棟を同じくしていた。

農業科の教師数は当時4人。現在は5人である。彼らは agrónomo (農耕学者) と呼ばれ、日本でいう農業専門学校卒業生である。

教える対象である農業科学生でも、土壌学実験は1、2年次にだけ行なわれている。私の赴任前は、それが全く行なわれていなかった。

当初は、他の教師の担当状況を見学してくれということであった。学校は、すでに2月に始まっており、土壌学の組み替えの話題は後回しの恰好となっていた。

II 相手国の受入姿勢と体制

私たち農業隊員の直接の相談相手は、文部省高等学校教育局の農業高校付属農場管理部責任者であるシスネロス氏であった。JOCVに対する彼の理解度は判断しかねるが、体育関係の長い協力活動から判断してみると、文部省のそれは、ある程度高いものと思われる。

現在にして思うに、初めて協力隊員を受け入れる農業関係では、要請内

容にみられるとおり、数多くの知識を吸収しようとしている反面、受入部門（配属先のこと。また文部省の一部）が積極的でないのが残念である。文部省内の中心的人物（農業指導関係の）が多く、事柄を計画しているが、それが計画倒れになっていたり、計画内容が人材不足（後述する）で貧弱であったりするのが普通である。その人物への交渉及びアドバイスいかんによって、全体的吸収速度（協力活動の進行）が速くなるものと思う。

配属先のチャテナンゴ農業高校では、協力隊へ派遣要請を行なった時点の校長は、今年の2月以前に配置換えされていた。新任の校長以下、各教師とも、協力隊員の派遣など全然知らされていなかった様子であった。私は、文部省のシスネロスさんとともにあいさつに行ったが、その時点で私のことが校長に伝えられたらしい。農業科の主任教師（農場長で新任。以前の校長から話は聞いていたということだった）も、仕事内容の具体的話し合いももちかけてこなかった。すべて文部省の本省どまりの私の派遣であったと思う。それに協力隊への関心も示さず、校長へのあいさつもわずか2、3分で終了し、それ以来音沙汰なしである。以前の校長は農業関係に従事しており、また農場主任も農業科にだいぶ力を入れて、農場運営など積極的に行なっていたというのが、助手などの話である。現在の校長は農業コースに興味を示さず、農場を訪れることさえ少ない。

赴任時にはカウンターパートはいなかったが、6月から、去年の農業科卒業生が私の助手として文部省から直接任命されてきた。以前から助手を置くという話は進められており、私がパートナー欲しさに文句をいっていた時期であった。彼は、他の学生もそうだが、化学的知識が貧しく、化学・実験を学んだといっているが、モル濃度、規定度など全然知らない。また、ピーカー、メスリンダーという名前さえ知らないのが普通である。土壌学に関しても同様で、土層など初めからA、B、Cの3層に分かれていると、平気でいう。土壌の酸性、アルカリ性など、言葉では知っているが、それがどういうことか具体的には知らない。しかし、農業に関しては、トウモロコシの品種名、陸稲の栽培法、病害虫の名前など、よく知っている。彼らは単に栽培面、家畜への飼料のやり方等を教室で教えこまれているだけである。

農業高校における部品、設備等がいったい文部省から補給されることからしても、中央との結びつきは強いものと判断する。しかし、農業高校自

国立高校(付属農場)で土壌学実験を担当

身も資金をもっており、独自の農場経営がなされている（実際には、資金がありながら活用しないのが普通で、変化・進歩を好まないとしかいいようがない）。文部省から送られてくる機類等もいろいろあるが、教師不足のため放ったらかされている。

配属先の農場長（高校の副校長2人のうちの農業コース担当）は農業コースの1教師であるが、具体的な農場運営など行なう気など示さず、その日暮らし。協力隊員への質問もなく、私が話しても、聞くだけは聞くが、結局、文部省の仕事だから……ということになり、話は終わる。

Ⅲ 業務活動状況

文部省から手渡された土壌学及び実験の計画書を示すとともに、これまでの活動状況、私なりの計画を述べる。対象は1年次と2年次で、3年次には、土壌保全の科目がある。

◎1年次

学科目：農業生産 No.1

分野：土壌と土壌の肥沃

実 験

1. 自然と土壌の重要性

(土壌の形態, 土壌生成の要素,
土層と農業における重要性。)

観察, 写生。

2. 土壌粒子

(土壌の無機物とその重要な性質,
土性と農業への重要性。)

虫めがねでの観察, 手
での土性の調べ方。

3. 土壌の構成要素と肥沃との関係

(土壌有機物の構成と重要性,
植物養分の起源と重要性,
土壌水分の重要性とその機能。)

土壌有機物の
燃焼法による
簡易定量。

4. 土壌の生産力(性)

(種々の土壌の分類方式,
土壌の診断とその重要性。)

野外調査, 土地の傾斜,
流亡等の観察と討論。

5. 土壌反応

(土壌PHとその意味,
土壌の酸性とアルカリ性の原因,
土壌PHの矯正方法。)

土壌PHの比
色簡易検定。

6. 土壤養分

(土壤養分の量, 土壤有機物と他の植物養分との関係, 土壤への施肥の必要性。) 土壤中の肥料の3要素 (N, P, K) の有無を調べる抽出実験。

◎2年次

学科目：農業生産 №2

分野：土壤とその肥沃

実 験

1. 土壤の物理性と植物成長におけるその重要性
(土壤の物理的特長と作物収穫との関係, 土壤水分と土壤の物理的性質との関係。) 土壤の機械分析 (土性)。
2. 土壤コロイドとその土壤に与える性質 (特長)
(有機・無機コロイドの最も重要な化学的, 物理的性質, 土壤コロイドの分類。) 腐蝕液の抽出。
3. 植物への養分供給源
(植物の重要養分とその機能, 植物組織の養分欠乏症, 土壤の化学的分析と植物組織。) 肥料試験 (針試験)。
4. 植物の成長と作物生産に及ぼす有害要素
(土壤の酸度, アルカリ性度とその測定法, 植物成長及び生産と土壤酸性との関係。) PHメーターによる土壤PH検定。
5. 土壤への施肥法
(肥料とその構成成分, 施肥法と土壤への施肥効果, 土壤分析と作物の施肥との関係。) 各肥料の混合時における物理的性質について。
6. 土壤分類の要素 (起源)
(土壤分類で使われている規準について, 土壤分類方式, 土壤地図とその使用法。) 土壤地図の凡例の見方。

このプログラムは一見して土壤及び肥料について網羅した恰好のものである。しかし、順序がまちまちであったり、実験と教室での講義とがあまり関係なかったりしている。教師に課された指導内容は、広範囲に及ぶものとされており、それに沿った講義を実際に行なうには、大学卒程度の科学的知識を要する。一方、実験は比較的簡単で低度なものである。このプログラムは1972年発行で、各教師ともそれに沿って行なっており、全部消化することは困難であるという。彼らは未改善のまま放置されていた専門学校卒で、その学校出身の彼らには

負担が大きい。学生に質問すると、それはすぐわかる。聞けば土壌の酸性、アルカリ性について学んだと答えるが、それをPHで表示するとわからないし、なぜ酸性土壌が存在するかとなると、誰も答えられない。塩基置換などという言葉も口からは出るが、どういうものなのかは答えられない。学生は土壌学について言葉では知っている判断するが、肝心の、どういう現象なのかを教えこまれていない。これは教師の責任であると同時に、教科書がないことが原因であろう。教師も参考書を紹介することもなく、ただ文部省から送られてくる参考書(ごくわずか。大学で使うもの)を利用している状況である。先生がノートを読み上げるのを学生は一生懸命に書き写しているのが講義風景である。

赴任時の4月、土壌学実験室は用意されていたが、備品は1つもなく、肝心の水道設備も壊れたまま放置されていた(ポンプが去年10月ごろから壊れた状態で農場全体が水なしであった)。日本からもってきた携行機材は、ほとんどが土壌改良用の重要機器で、蒸溜装置、PHメーター、土壌調査道具、土壌簡易検定器などの他は、学生実験には使えそうもなかった。当初、土壌を改良するために自分なりの小さな実験室をと考えていたので一部高価な機材をもってきたが、簡単な土壌学実験用の試験器具をもってくればよかった、と思ひました。しかし、水なしでは何もできないので、とりあえず壊れた水道ポンプを早く直してくれるよう、農場長や文部省に何度となく頼んでいた。私の行くたびに、いつも「来週中には」という返事であった。農場長にしても、文部省訪問は気がすまないらしく、なかなか行ってくれないし、他の教師も水なしで平気であった。首都から遠く離れた地域の悩みでもある。

5月に入ると、文部省から簡単な備品が届いた。英国製の簡易PH測定セット(比色法)、検土杖等は、すぐ使えるものであったが、他にピペット、比重計、アルコールランプ、時計(タイマー)、ビーカー(小)、50ml(定量)フラスコ、メスシリンダーが、それぞれ10個ずつあった。何に使うかの見当もなく送ってくるという次第である。試薬はいっさいなし。私には「使う試薬をリストアップしてくれ」と伝えただけであった。試薬をもつてこなかったことを悔んだ。しかし、ちゃん

とプログラムもあることだし、余計なものより、すぐ使えるものが必要であることは承知のうえであろう。

要請内容によると「土壌改良及び土壌保全の指導を学生、教師を対象として行なう」ということであった。これは現地の土壌がやせて酸性化しているということであった。よい土壌を改良することはあまり聞かなかったが、こちらへきてびっくりした。エル・サルヴァドル国は川の多い国で、特にチャラテナンゴの位置する北東部は石ころだらけの土地。土層は浅く表土まで大きな礫が混じっていて、どうしようもないのが大部分である。(しかし、一部は平坦な地形が続き、礫のない土地もある)。比較的新しい沖積土壌で、微砂を多量に含み、泥灰岩土壌にも類似する有機物を含み褐色を呈している。一部粘土質土壌も分布している。埴土でも軽度な方で、いったん乾燥すると硬くなり、土塊を形成(乾季には硬くて耕すのに大変だが、微砂質であるため水分下降がすみやかでなく、表面を覆う現象がみられる)するが、雨季でもクワに付着するのは少なく、粘着力は大きくない。土壌調査は実際に行っていないので、詳細を記すことはできないが、この国ではアメリカのクソス試案を用いた土壌分類が、エル・サル大学農学部教授たちによって1969年ごろ行なわれ、その結果が74年3月出版されている。しかし、全国的には詳細に発表されていない。この国は川と火山の多い国で、土壌分類も複雑さがみられ、大きな分類法に傾いている感じがする。

次に、私のこれまでの協力活動の経過を述べる。

私がチャラテナンゴに赴任したのは聖週間あけの4月も12日になっていた。当初、各教師の講義風景(高等学校で)をみていたが、土壌学を受け持っている教師など、私に授業時間を教えるどころか、私が聞かなければ、「かってにしておれ」といわんばかり。初めての日本人に対して教師たちは関心がないのか、全然教えてくれず、誰が何の科目を担当しているのか、いつ農場へ実習に行くのかさえ、こちらが黙っていれば、いつまでも教えてくれないといった状況であった。

学生への全体的紹介もなく、こちらが教室をのぞいて一番うしろで見学するといった調子で、学生の方が自己紹介を頼んだものである。学校では時間を過ごすのは問題ない。外国人みたさに学生が集まって

きて、いつでも大変だった。校長をはじめ、協力隊員に対して特別な取り扱いをするでもなく、私はただ時間を過ごすだけであった。文部省にも、私の仕事内容について具体的に説明してなかった様子であった。私自身、いろいろ感じては表面に出さない主義で、適当に機会をみつけては彼らの話す内容から判断していた。学校には先生方の特別な机がなく、室はあっても全教師のもので、会議用のものであった。

学校の状況は、授業中でもうるさく、日本の幼稚園のようである。窓からは自由にのぞくし、先生のいないクラスは外でソフトボールをして遊んでいても、誰も「うるさい」という言葉さえ出さない。当初は、始業と終業のベルの区別さえつかない状態であった。

農場はチャラテナゴの町（農業高校のあるところ）から約3km離れている。そこでは、トウモロコシ、陸稲、キビ、豆類(あずき豆)、柑橘類、野菜類（二十日大根、キャベツ、キュウリ等）の栽培実習の他、牧畜、養鶏、養豚、養蜂等の実習を行なうところである。しかし、ほとんどが栽培であり、他の農民と変わらず、先生のいうがままに栽培を行なっている。学生自らの実習は、現在、実施されていない（以前はあったらしい）。教師は学生の働き具合によって、10段階の評価を行なっている。ただ、教師は立って、学生の働くのをみているだけで、自らの手をよごすことは決してしない。学生は9、10人程度で1グループを編成し、2週間毎に異った物を実習することになっているが、明日は何をするかわからず、来週の子定など全然ない。教師不足のため、農耕と野菜栽培、接木の他は、豚小屋等の掃除を行なっている。

私は5月から1グループを要求して実験室の整理を始め、文部省から届いた備品を利用して実験を教えた。しかし、水のない状態では、講義と変わりなかった。土壌の土性の分類の仕方、土層の発達と見方、土壌の検土壌によるサンプリング、PH簡易検定器による土壌の酸性・アルカリ性分析のためのサンプルの準備の仕方等、1、2年を対象に教えた。私が講義と変わらないことを教えても、彼らにとっては新しいことで、難しいようだった。土壌学のクラスと重複した内容がなかったのにはびっくりした。私のスペイン語は不十分で、たえず笑われていたが、図書室でみつけた1冊の土壌学のスペイン語訳本を

もとに、なんとか教えていた。実際のPH検定になると、約100 mも離れた井戸まで水汲みに行かせた。しかし、ドラム缶1個さえ自由に手に入らないのが現状で、2 kg入りのミルク缶を利用していた次第である。PHの比色検定法では、指示薬の色の変化を説明するにも苦勞したが、こちらでは学生はおろか、教師さえ英語が理解できず、英国、米国製の器具のスペイン語訳も私が行なうという苦勞もあった。

学生は化学的知識が低く、また興味もないというのが大部分で、少数の学生の他は、時間つぶしに大変である。黒板の前での説明など、学生自身はいままで1度も行なったことがなく、うわべだけの説明に満足している様子だ。

水の無い実験室では実験にも限度がある。蒸留水さえ薬局で買っていたのが、使用が激しいため、あまり好んで売らなくなった。何度も水道ポンプを直すように頼んでいたが、いっこうに進展しなかった。学生にしても、家畜小屋の掃除にも、家畜へ水を与えるのにも、井戸まで1輪車で水汲みに行く状況であり、時間の浪費が目に見えるのに、農場長には解決しようとする気配が感じられなかった。

2週間毎に交替するグループ単位の活動も、雨季が本格的になると、ばらばらの活動になり、実験室へなど1グループもこない日々があった。1、2回のクラスで終わるといった調子なので、私もとうとう7月からは野外での実験だといって、彼らを外に引っぱり出し、畑を耕し始めた。

6月の半ばからきた私の助手も、2人きりの会話にはあまり乗り気でなく、外での活動を好んだ。日本式の野菜のつくり方、土壌の準備の仕方の勉強等といった目的で始めた畑仕事は、けっこう好評であった。一方、実験室の備品づくり、器具乾燥台、土壌サンプル乾燥箱、茶品棚の整理等を西洋式の大工道具を駆使して始めた。

農業試験場でも1週間、文部省から特に頼んでもらって、簡単な実験を行なうとともに、資料収集も始めた。試験場の実験風景について述べると、次のようである。器具はかなりそろっているが、肝心の実験は、簡単な土壌有効成分(N, P, K)やPHの実験で、時々、有機物定量等、農民のもってくるサンプルの分析を行ない、結果(評価対策なしの)のみ送達している次第である。これは土壌実験室の話で

国立高校(付属農場)で土壌学実験を担当

あるが、一方農芸化学実験室では、トウモロコシのタンパク質(N定量)、他の植物の葉のN、脂肪の定量を行なっている。ここも人材不足で、本格的な土壌研究は行なわれていない。この国では栽培中心の試験が行なわれており、土壌調査等、改良方向へ進展するのは難しい。農牧省で働く技術者と呼ばれる人々も、前述の農業専門高校卒である。全国各地で栽培実験を行ない、そのデータ分析は、すべて、この試験場で行なっている。

8月に入って、携行機材が届いた。文部大臣等も驚嘆していた。携行機材の引渡し式及び学生への注意を行なうから、学校で機材の梱包を開くのを待って欲しいとのことであったが、いっこうに指示がないので、私が勝手に開けてチェックした。蒸溜装置などは使いたくても水がなく、私としてはがまんできずに、「農業高校の化学・物理実験室を使わせて欲しい」と農場長や文部省に頼んだが、「だめだ、もう少し待て」ということであった。カウンターパートである私の助手にも、一応の操作法等を教えたが、ものめずらしいのか、勝手にいじり回して、目が離せなかった。

野菜栽培の加藤隊員から種子を分けてもらい、学生に植え付けてもらった。結果は、日本の野菜など育ちにくく、すぐ病気になる。雨季には難しい。1区画の畑をさらに何区画にも分け、細かく耕して、1度に種々の野菜を植えることは、学生たちにとってめずらしいことであったようだ。「日本人はきつい仕事を要求する」とも語った。

私のカウンターパートは教室の中での難しい話より、外での活動が楽しいらしいが、学生を働かせて自分はみているだけ。私がいくら「クワを取れ」といっても、決して取らなかった。水なしの状態が続き、私ももっぱら畑を耕したり、実験室の小道具づくりを助手とともに行なっていた。私の仕事を直接彼に教える機会も少なく、彼も来年ブラジルの大学へ行くといいたので、何もできない日々であった。学校は10月中旬まで、農場実習は9月30日までとなった。私はついに調整員の了解のもとに、ポンプを取りはずして修理することにした。農場で働く2、3人の人々の助けで、深さ12m余もある井戸から水中ポンプを取り出した。修理予定先の工業学校も「日本人の頼みならば」と快く引き受けてくれた。取り出した翌日、文部省の担当者の

ところへ足を運んだ。調整員からも強くお願いしてもらった。

「少々勝手すぎる」と怒られたが、全国学校修理管理部長のところへ通された。彼は倉庫に1個しかないポンプをチャラテナンゴへ取り付けることを許可してくれた。それから1週間、私はポンプ取付業者との連絡者となり、10月の初め、ようやく1年ぶりにポンプを取り付けることができた。これも、日本人である私たちにしかできない芸当といふべきであろう。反面、開発途上国の内部事情をみた思いがした。

ポンプを取り付けて後、他の施設には水が出たが、実験室までは届かない。はて？と思って、実験室の前の植樹されたところを掘り起こすと、案の定、壊れている。これを我々素人が全部修理した。農業コースの教師の協力は何も得られなかったことが残念である。また水の出る喜びなど私に語ることすらしないという具合である。現在では、家畜小屋の掃除など1人で30分もあれば終わる。農場管理者として農場への愛着がみられない教師が多いことは遺憾である。

さっそく蒸溜装置を取り付け、蒸溜水をつくり、PHメーター、土壌簡易検定器を活用した。10月中旬に開かれた農業高校の農場祭には、実験室も学生によるデモンストレーションを行ない（土壌の酸性と植物養分との関係をテーマにした）、また他の携行機材の展示も行った。PHメーター等、高校の化学の教師すら初めてみたといった調子で、熱心に操作法などを私に質問した。以前の学校長の興味の高さと比べ、その日は盛況であった。

そして10月が過ぎ、11月から翌年1月末日までの3ヵ月間、学生は休みに入った。現在、農場へは学生は各自の担当日（約15日間ずつ）にやってくるだけである。私は彼らと畑を耕したり（野菜の植え付け）しながら、堆肥づくりの実習を教えている。そして、農場のこまごまとした問題には、いつも私が便宜を計っている。

私の行なってきた仕事の内容は、あまりにも貧弱なものにすぎなかった。土壌学実験も結局はなかったものとして片づけられたし、全部終了することができなかったのは、私自身の頑張りが足りなかったのだと思う。ただ1人の日本人が自分のやりたい仕事もできず、淡々と過ごした日々であったかもしれない。現在でも、「これで農業高校の教師か」と自分の身分のほどを疑いたくなる扱いを受けていることも

国立高校(付属農場)で土壌学実験を担当

確かである。これは誰の問題かという以前のものであり、現地での協力活動の難しさを示す一面でもあると思う。

IV 将来の予定

将来の見通しとしては、これまでにつくられたプログラムに沿って、学生らにとっては新しい知識の分野になるだろう講義、実験の両方を担当していく。要求しないと、いままでと同じ状況になる恐れがあるので、文部省の援助を受ける(各教科の担当は地方レベルで決められており、各教師とも、自分の得意とする教科をあげ、それに沿って各自の教科を決定している)。私独自の土壌改良と管理・保全も、現地側で出された資料の収集がある程度できたら進めていきたいと思う。現在は土壌をみて歩いているだけにとどまっている。全国的にどの地区の土壌がいいのか、資料不足である。農牧省の試験場に出版物があると思うが、なかなか譲ってくれない。

カウンターパートはブラジルへ行くことになり、現在は私だけである。新しくみつける予定であるが、文部省も積極的なので、相互に検討のうえ、決定するつもりである。また私個人も来年は2年生を中心とした土壌研究クラブをつくって、興味をもっている学生と活動を始めることについては了解済みである。これは学生自身、農場以外はあまり知らないし、また畑は種子をまけば収穫できるという考えにもとづく学生たちの土壌への取り組み方を直していくためでもある。

農業高校の教師には、農業、畜産等に関する総合的知識が必要とされることは私も実感した。ここの教師は一応、そういう形式をふまえてきているので、ある程度知っている。したがって日本からも、こうした隊員を派遣する必要性を感じず、日本とのレベルの違いなど、いうまでもない。

V 問題点

農業隊員としてはニル・サルヴァドルにおける初めての協力活動であるが、それは文部省、農業高校にのみとどまるものとは考えない。この国では文部省は、農業高校と大学に農学コースをもっている。一方、農牧省は農業専門学校(Esavela Nacional de Agricultura=E.N.A.)をもっており、そこの卒業生が農牧省や文部省の農業高校の教師をしている。以前までのE.N.A.のシステムは、7年生から入学できたが、現在は高校卒業

生を対象としている。学ぶことは高校とほとんど同じだと判断するが、E.N.A.の方は、農牧省がここ2、3年、かなり力を入れており、全寮制度、設備の充実、教師の充実を行なっているという。1度訪問してみたが、さすがに、学園という印象を受けた。実習農場は農牧省の技術者の実験と合わせて、かなり整備されている。農牧省が農業教育に力を入れることは充分理解できるが、そこら辺に文部省、農業高校との問題がある。

E.N.A.の卒業生は、agronomo(農学者)と呼ばれ、協会をつくっている。農業高校卒はbachiller(一種の特業師)と呼ばれている。しかし、実際に社会で働く時点では、給料に大差はない。常に表面化しないagronomoとbachillerの争いがある。農業高校で働くagronomoはプライドが高く、実習で学生に自分の特技を教えたがらず、真面目に実習を行なわないといわれている。当初、私は、自分なりに教師らに対する判断をしていたが、助手らの話を聞くと、知っていながらも教えない。手間のかかることはやりたがらないというのが常であるという。私も農場で働く教師らを見て変に思った(「何も知らない」とログセにしていた)。教育の場をつくってやろうとする気風が感じられない。私も彼らを相手に1人相撲をとっていることになっていたわけである。agronomoである彼らは「現在の農業高校は無意味だ」という(助手たちの話では、新聞投書まで考えているのが現状である)。

ここでは学歴がものをいう。大学卒などは、ものすごく給料が高く、農業高校などで働く気などない。文部省としても彼らを雇うには予算的に充分ではないといわれる。日本では全然考えられないことである。文部省は農業高校をもっているが、人材不足で、彼らなりの計画遂行が難しく、時間を要する。これらの問題を教育制度の段階でとらえてみれば何もいうことはないが、農業開発に協力する私たち農業隊員としては、やはり留意する必要があると思う。アメリカの平和部隊が農業高校で働いているということは聞かないが、専門学校や農牧省の試験場等で、かなり活動している(高校の普通科コースでは働いている)。

農業に関する資料収集となると、文部省から、管轄の異なる農牧省への依頼という形で処理される。時間がかかるのと、提供をしぶるのが実情である。文部省は、これから図書などをそろえていくつもりらしいが、農業高校にはテキストもなく、参考書もごくわずかといった状況である。農業

国立高校(付置農場)で土壌学実験を担当

部門に関しては、文部省と農牧省の間に谷間が存在しているものと思う。

日本の農業について農場で教師らに話ると、「ここでは、すぐには適用できない」といいながら、これは「アメリカ式だ」の、「どの国の方式だ」のと私に説明する。彼ら自身、この国に何が向いているのかを探る、「実験段階」でさえないと思う。

文部省から送られてくる備品にしても、何に使うという見当もなく送られてくるのが普通で、こちらが試薬や器具リストを出すとびっくりして、「金がかかるので待て」などと答える。

農業高校の学生は科学的知識は低い、農業に関してはレベルが高い。土壌学も「実際に農業に使えるものである」と教え込まないかぎり、興味を抱かない。現在は教師の指図のもとで動き回っている感じで、2年生になっても自分では栽培実習できない。こうした流れが農業部門の主流となっている。これを変えるには、農場自体が新しくプログラムをもつことが必要であろう。「農場を学問追求の場にしよう」などと、いつも語っているのは助手たちである。肝心の教師が動かないのが残念である。

農業高校にはスクールバスがなく、ほとんどの学生はヒッチハイク。歩く人はいない。そのため時間的にルーズである。農場で使用する空缶代なども学生に要求するのが普通で、農場自体で買う気など全然ない。

Ⅶ 現地生活

首都から北東へ73km離れたチャラテナンゴは、チャラテナンゴ州の中心地である。水道、電気等、生活に不自由はない。しかし食生活の面での問題は多い。ここではほとんど現地食。トルティーヤ、フリホーレス(豆類)、ケン(チーズ)、肉(カルネ)である。私の下宿先は中流階級で、昼食には陸稲、肉が出る。その他の食事は、トルティーヤと豆類(フリホーレス)である。野菜好きの日本人にはきつい食事であるが、慣れてしまえば、どうということもない。私は何でも食べるたちなので、体重も現状維持。初めのうち下痢などしたこともあったが、現在では、そういうこともなく、いつも野菜サラダを夢みている次第である。

町をはずれると、各家庭には水道がなく、共同水道を使っているか、川の水を使用している。ボコをまとい、はだしで歩き、土でつくった家に住んでいる。自分の土地をもっている人は少なく、日雇労働者が多い。1日

中働いても日本円に換算して500～600円の収入である。都会には車が氾濫し、着飾った人々が多い。貧富の差は歴然としている。

我々日本人にとって中国料理は欠かせないもので、どこの国へ行っても必ずある。ラーメン、焼そば、野菜いため等を食べて栄養を補給するために首都サン・サルヴァドルへ出かけるのが普通である。日本では高級なエビ、カニ、ステーキ等を、ここでは安く食べられるのが魅力である。

チャラテナンゴは小さな町で、住民はだいたい顔なじみである。日本人とはどこへ行ってもすぐ友だちになり、友好的である。お祭り（フィエスタ）は毎日、だいたい、どこかであり、トウモロソンの収穫時になると学生は、たとえ翌日が試験でも、遠くのフィエスタへ出かける。非常に熱狂的である。

アメリカの平和部隊も、3人がすでに普通科コースに入っていたが、反米感情も強く、アメリカ人は人気がない。

10月に買ったオートバイは、農場での仕事及び農場の雑用をするのに便利である。そして週末の隣村訪問など数少ない余暇の活用にも役立つ。

吉元隊員の報告書を読んで

宇 野 要 次

吉元清君がエル・サルヴァドル国では初めての農業関係の協力隊員として、国立チャラテナンゴ総合高校の農業コースの教師として派遣され、約9ヵ月の間に、日本とは全く国情が異なる状況の中で種々の障害を克服して、なんとか自分の任務を遂行しうる状態にまでなしたとげた、その活躍ぶりが実に生々しく報告されている。

国情の違いとはいえ、彼の受け入れ態勢が末端まで整っておらず、配属先の学校の校長以下各教師も、彼が協力隊員として2年間くることを、彼が文部省の農場管理責任者と一緒に学校に行くまで知らなかったのは、彼としては大変なショックだったと思われる。そのうえ、彼の職場である土壌学実験室は新設2年目の農場に付置されたものとはいえ、機械、器具、薬品など一切が整備されておらず、さらに実験室はもちろんのこと農場全体で使用される水道の施設が故障したまま既に半年以上も放置されているような状態の中への着任であった。彼は何かともあれ水道の修繕が先決と考え、ねばり強く農場長や文部省と交渉し、最後は調整員の協力を得て故障後1年目に農場の水道を修理した努力は高く評価されるべきであると考ええる。

彼の配属先の文部省管轄の総合高校の農業コースにおける教育の目的、方針及び生徒の資質などがわからないので、私の想像にすぎないが、文部省は総合高校の農業コースの他に大学の農学コースを所管している。一方農牧省は農業専門学校をもっていることを考えると、この総合高校の農業コースは戦前のわが国の農学校のような位置にあり、農家の子弟を教育する機関としてあるように思われる。それ故、農学をそれぞれの基礎学科の面から学問的に教えていくというより、むしろ実践的に作物の栽培・肥培管理、家畜の飼養管理を教える学校であるように推察される。

そのような観点から、文部省から彼に手渡された土壌学及び実験のカリキュラムをみると、学問が進歩し分化しているわが国で教育を受けた彼が、この計画書の順序がまちまちで、講義と実験との関係が少ないという見方とは別に、このカリキュラムは講義にしても実験にしても、生徒の身近なもの

から土壌学を教えていこうとする方針のようにはうかがえる。

土壌学にかぎらず、その他の基礎学科でも、生徒が教えられてきて頭の中にあるものは片々の集まりで一貫性がないことを、彼は自分の受け持ちの授業を通じて、いやというほど知らされたようである。しかし、これは一般的によくみられることで、生徒に教室で教科書の上だけで教えることより、体験を通じて教えていく方法のほうが、よく理解してくれる。彼の配属先の高校でも農場実習が重視されているようであるが、発展途上国としては当然と考える。彼も、教室での教科書による教育も必要ではあるが、圃場で作物栽培を通じて農業全体の中で土壌学を教えていくことが必要ではないかと考える。

職場も整備され、2年次は初めから順調に講義も実験も進められる状態になったので、余暇を利用して、彼が発発時から考えていた土壌改良の仕事に取り組むことを計画している。その場合の隘路として文部省と農牧省の間の俗にいう“縄張り争い”をあげている。このような縄張り争いは、なにも発展途上国にかぎられたことでないが、発展途上にある国では特に激しいようだ。その渦中にまきこまれてしまえば、それこそ大変で、本務にまで支障をきたすことすら予想される。そのようなむずかしい状態の中で、あえてニル・サルヴァドル国全体を対象としたような広範囲にわたる土壌改良、管理保全の仕事に取り組むより、任地の周辺で余暇に自分の足で確かめうる農地についての土壌改良に取り組む、そこの生産力を向上させれば、協力隊員としての評価は一層高まると考える。（協力隊技術専門委員）

体育学校でのレクリエーション指導

〔定期・中間報告書〕

派遣国 エル・サルヴァドル 49年2次後期組
職 種 体育(レクリエーション)
氏 名 井 上 孝 一
配 属 先 文部省体育教師養成学校
サンアンドレス

井上隊員の略歴

氏 名 井 上 孝 一
生年月日 昭和23年9月3日
出身 県 神奈川県
職 種 体育(レクリエーション)
派遣期間 50年4月～52年4月

I レクリエーション指導の概要

1. 業務の経過

首都サン・サルヴァドルから約30kmのところにある体育学校において、5月中旬から現地教員と組んでレクリエーション指導に当った。1クラス週1回の授業ではあるが、1グループ15名前後の学生数と1時間120分の授業。学校行事の多い中で現地教員の積極的な協力もあった。具体的には体操におけるレクリエーション指導、ゲーム指導、集団演技の指導、その他、陸上競技、ボール運動など体力養成強化的なものから、学校行事、社会的行事まで、かなりの項目が短期間ではあったが消化できたと思う。

レクリエーションという学科の予備知識がなかったと思われる学生、現地教員にとって、新しい種目ということで興味をひいたようである。さらには、この種目の特殊性から肉体的疲労も少なく済み、比較的楽に授業に取り組めたようだ。また身体的に故障のある学生でも参加できる場面が多かったため、全員がほぼ同水準で進展していき、計画的にカリキュラムが組めた。

2. 体育学生の現状

体育教師養成を目的として設立された体育学校（2年制）は、現在までに多くの体育指導者を各地におくって、体育の普及に貢献してきている。そして今日でも体育指導者の養成は重要な課題とされている。しかし近年、卒業生の体育関係への就職率は過去のそれに比べ数%であり、最悪の事態である。

このような現実の中で、学生の大半が卒業後の身の振り方は白紙であり、彼らの多くが体育学校は単なる学生生活の1ステップにすぎず、授業のカリキュラムはそつなく消化しているものの、けっして体育教育指導に関して向学的な姿勢を示していない状態である。このような問題をかかえているとき、レクリエーションと称する科目は指導者側にも学生側にもきわめて誤解を招きやすい。

3. レクリエーションという名称

現在まで私が指導のポイントとしてきたことは、小学生を対象とした体育指導、または中学生を対象とした体育指導ということであった。隊

員の要請の背景もそのことを希望してきたと思われる。

マットを用い、とび箱を用いながら、器械体操ではなくレクリエーションと称され、ハードル競技を行なってもレクリエーションと称され、水泳を行なってもレクリエーションと称されている。小・中学生を対象にした体育指導を教授してきたつもりが、レクリエーションという語を執拗に駆使したためか、一部では国語、社会、体育等の科目の他に、レクリエーション科目があると誤解されはじめている。また小学校では、陸上競技、ボール運動の他にレクリエーションが加わったのが体育である、とも受け取られている。もっとも、日本においてもレクリエーションを科目の1領域としているのは体育系大学ぐらいで、おそらくレクリエーションという領域は科目として取り扱われていないと思う。したがって、隊員選考の際の名称について、職種名は慎重に命名する必要があるとともに、私の活動のようなものは「小学校体育」とか「中学校体育」の指導というように改めた方が的確ではないかと考える。

4. 体育学校・隊員活動の今後

現在は51名の2年生が11月上旬まで授業を受けている。その後は前述したような事情から、体育学校では、来年度の新入生は本年度同様選考を一時ストップし、現教員の再教育を行なう方針である。しかし、その教員数、期間等は具体化されていない。具体案が出るのは11月過ぎになると予想される。

最近、私に文部省から、各地の小学校教員を対象にした体育教員養成体育実技講習会等の講師として出席してほしいとの依頼があり、私も体育学校の授業の合い間をぬって、できる限り応じている。私としても、この方法は実技伝達の面からかなり効果のあるものと判断できるので、今後は各地を巡回指導したいという希望をもっている。

II 具体的な活動と問題点

1. 業務経過

エル・サルヴェドル体育学校では過去8年間にわたって体育教員養成が続けられてきたが、近年の就職市場の飽和状態から、1975年11月上旬その事業を中断した。

学生不在の体育学校での我々隊員の業務は、具体的にはなくなり、私

の場合は渡部、渡辺両隊員と当国陸上競技協会の主催する競技会および文部省体育局の主催する各種競技会の役員、審判として協力した。

ちょうどこの時期に、中米陸上競技大会（コスタ・リカ大会）が開催された。当初、エル・サルヴァドル陸上協会は出場選手25名を空路輸送する予定であったが、事務局の予算不備から出場白紙となり、開催前日、我々の手でバスをチャーターし、やっとのことで選手を派遣できた。しかし、バスで行ったため36時間もかかり、すでに競技は進行中で、4日間ある大会期間のうち、2日目からの参加となってしまった。

将来の陸上競技指導者としても、また選手としても有望な人材が育っているときだけに、協会の組織力のなさ、業務遂行能力の未熟さが悔やまれてならない。今後は、選手への技術的アドバイスだけでなく、協会の構成、組織のあり方まで手を伸ばしていかなければならない。

本年に入ってから体育学校では現在の小・中学校の体育教員の再教育を実施することが具体的に決定した。初めは3月上旬開始の予定であったが、かなりの準備期間を要したため、5月上旬、ようやく50名を1グループとする1回目の講習会（再教育）が4週間にわたって開催された。続いて50名が1グループとなって、11月までに6グループ300人を対象にそれぞれ4週間ずつ実施される。なお講習会は主に小・中学校の体育専門の教員を対象にするもので、これとは別に文部省では、1昨年来、体育普及のために他教科の専門教員を対象に2～3ヵ月間の短期の体育実技伝達講習会を実施している。

2. 将来の予定

現在の体育学校の業務は、新教員養成という従来からの形でなく、再教育というやや後退的とも思われる状況ではあるが、文部省が特に力を入れて開催している各地での短期体育実技伝達講習会が定期的に開催されることとなった。この講習会を通じて普及が続けられていけば、学校体育の発展は期待できるものがあるといえる。

来年度の新入生受け入れについては、教員間では「来年度は必ず入学試験が行なわれる」という話であるが、かなり希望的な観測とも思える。現在のところ来年度も体育学校が存在するかどうかも、全く白紙である。

ここで私の後任隊員について述べてみよう。協力隊員は何年もかかって体育を、スポーツを広めてきた。だが、一部では、その協力活動を受

けることにアレルギー症状を示していることも事実としてある。

例えば、体育の授業の指導法はまったくの日本の方法で、中米人の性格や行動様式を考えると、もう少し中米的な体育指導がなされてよいし、中米的な施設があってもよいと思う。市内の小学校はカトリック系の学校が多く、それらの学校は教室だけの教育施設で、中庭さえない学校もある。中庭があっても、コンクリートで固められていて、グラウンドというにはあまりにも狭い学校がたくさんある。日本的な感覚からいえば、1つの学校には1つのグラウンドが必要であるが、グラウンドのもてない小学校のためには、せめて、その学校のある地域に公共の体育施設を建設することが望ましいと思う。国土の狭い所での策としては当然であり、一般住民の体育教育にも共同使用できるものとする。それには技術協力の枠を拡大して、現地の指導者による海外視察という方法をとって、今後の発展を期待した方が、その国民性や現状からいって、好ましいと思う。

エル・サルヴァドルの体育、スポーツへの技術協力は、今後は体育、スポーツ発展のための組織づくりに当る時期に入っていると考える。そして、それを発展させていくためには、きわめて独断的ではあるが、ラテン人の習慣、国民性までをも一部改造していかなければならない点もあると思う。例えば授業中にガムを食べる者、タバコを吸う者など、日本人からみれば“悪癖”を彼らは全く意識せずに行なう。指導中に大変気になることであり、個人的には技術協力以上に改革したい点である。それらの行為を無視しないと、とても現地人の中（教育程度の低い層）へは入っていけないと感じる。技術協力を進めるうえで一番むずかしい点である。

3. 問題点と相手側の協力

1年を経過すると、残る任期の業務の量、方向が予想できるようになる。そして、その業務に携わった結果が、何か1つの具体的な形に残るようにしたいと考えるのは、隊員の多くが抱く気持ちではなからうか。

現在の私の業務は、現在の教員を対象にした講習会であるため、技術の伝達という点からは、直接それが相手に伝えられているので、理想的な形で進められている。技術指導（小・中学校の体育）の教科書も同時に作成に当たっている。

当国に協力隊が入って10年近くなろうとしている。体育の普及、発展という一面をとらえた場合、その協力事業はかなりの成果を収めている。具体的に体育授業を一見しても、その成果を窺い知ることができる。しかし残念なことに、技術指導以前の施設、用具、参考書籍の面を考えると、“十年一日の如し”である。例えば体育学校の施設に関しては、発足当時と比較してなら整備拡充されたわけではなく、むしろ、それらの老朽化を考えると、衰退しているともいえる。用具の面においても、隊員が携行したものがすべてで、ストップウォッチやボール1個さえ学校みずから購入する姿勢がみられない。ふたことめには「日本から贈ってもらえないだろうか」という言葉が出る。「どのようにして買ったらいいか」という言葉は聞いたことがない。体育学校の予算支出を現在調査中である。

体育指導のための参考資料、プリント等は、多くの隊員の手によって作成され、その数もかなりになっている。それらを整理すれば、りっぱな体育指導書が完成するものを、職員たちは一切目もくれずにいる。1冊のりっぱな本になっているか、あるいは自分が考えたものでなければ相手にしない。プライドが高い故か、人からのおしきせを好まない国民性故か、数あるプリントは宝の持ち腐れである。海外での協力活動は、協力者が去るとともにプツリと切れてしまうような、いやな予感が、高くつまれた参考プリントを見るたびに感じられる。せっかく作成した、任期中の活動結果を形にした参考書、指導プリントが利用されていない事実をみると、海外協力活動は、結局、その場かぎりの技術協力に終わってしまうのだろうか、という疑問が拭い切れない。

4. 小学校教員の体育実技伝達講習会

この講習会は、昨年から文部省体育局の主催で実施されている。本年は特に力が入れられ、キャンペーン形式で、全国20ヵ所で開催された。現在、体育学校において実施している体育科の専門教員を対象とした講習会とは別に他教科の専門教員（国語科、社会科など）を対象とした短期間の伝達講習会である。

開催日は2週間ぐらい前に決定されるらしいが、会場、時間など詳細がわかって後、体育局から私のところへ連絡があるので、ほとんどが2、3日前になって「実はどこそこの市で講習会があるので、公開授業

をやってほしい」との依頼がくる。そして「内容はどんなものでもけっこう。陸上でも体操でも球技でも」といわれると、かえってとまどってしまうものである。「どんな施設で、用具は？ 対象とする学年、生徒数は？」とたずねても、さっぱり要領を得ない。事前に調べに行きたいのだが、2、3日前に知らされ、しかも首都から50kmから60kmは楽に離れているところでは、とても行けない。こんな状態で授業の教案をつくるのは酷な話である。

当日は朝、5時か6時には車に乗り込み、出かけなければならない。2、3日続くと肉体的にはひどくきつい。我々を乗せた体育局の車が会場に着くと、子供らが車の回りに群がる。そして、どこへ行っても、男子は必ず空手のかまえを人なつっこそうにする。開会式となると国歌が流れる。実に長い曲である。そのあと市の教育長や教育委員の長い話が続く。たった3日間ぐらいの講習会のために、国歌を歌い、数人の祝辞があるわけで、こんなところから判断すると、この国の人々は日本人以上に形式的なことを重んじる国民ではないだろうかと思われる。そして、教育長といえども実に若い。30代後半から40代といったところがほとんどで、日本の常識では考えもつかない。

陽が高く昇り、カンカン照りになる頃、やっと私の公開模範授業が始まる。模範授業とは名ばかりで、授業の流れや盛り上がり、教育的な裏付けの目標までにはほど遠く、実際には、陸上にはこんな運動があり、ボール運動にはこんな方法がある、といった技術の一方的な伝達にとどまるといった方が正確かもしれない。指定されたクラスの30～40名の児童を相手に午前と午後、それぞれ1～2時間授業し、その模様を会場に集まった各小学校の教員に公開するのである。

グラウンドを見ると、驚くことがたくさんある。カトリック系の学校は大半が、コンクリートで固められた中庭があるだけで、グラウンドとはいえない。農家の庭先の方が倍も広い。こんな狭い所で、どうして40人もの生徒を動かしていけるだろうか。そうかと思うと、かりにグラウンドがあってもコンクリート製ではなく、地面がガタガタなうえ、ゴミだらけ。最も悪いことにはガラスの破片がたくさん散らばっている。また乾期には、砂ぼこりで足首まで埋まるようなグラウンド。雨期には水たまりができ、雑草が生い茂るグラウンド。グラウンドというより、あき

地といった方がいい。こんなところで、この先生は今日までどうやって体育をやってきたのか不思議である。

さらに、「これが体育の用具です」と持ってくるものは、空気のぬけたサッカーボール1個とロープ1本だけ。授業の教案など作っても、まったく役立たずである。

講習会もたび重なってくると、これらの驚きも薄れて、授業の教案は、いつも即席。児童用のイスや机を、とび箱や踏み切り板とし、新聞紙をまるめ、糸でしばってボールとする。会場に集まった小学校の先生たちは、驚いたようなまなざしで、いっしょうけんめいノートをとる。その光景は、見ていてなかなか気分がいい。

教案を考えずに出かける理由としては、上記の他に、コミュニケーションの問題がある。私と児童とは、それまで互いにまったく見たことも、話したこともない間柄であり、また私が異国人教師ということもあって、私の顔を時間中じっと見つめている子、私の動作ばかり見つめている子がいる。「こんな田舎へきた日本人はお前がはじめてだ」といわれるような場合はまったく授業にならず、日本の歌を歌って帰ってきたこともあった。同じ小学校1年生でも年齢的には3～4歳のひらきがあり、田舎へ行くと、特にこの傾向が強い。あまり体の大きな子は遠慮してもらいたいという、適当な体格の1年生は、クラスで数人しか残らないという珍現象もおこり、まったく授業計画が立てられない。

田舎では、講習会で人が集まるとなると、一種のお祭りである。自分の娘、息子が授業に参加するといえば、家族総出で見物にやってくる。その数が50名を越えると、まるで運動会のような雰囲気となり、即席の応援団ができる。ある時は、ボールを渡すりレーだけで1時間終わってしまった。その後、記念撮影などもあり、朝早くから何をしに出かけてきたのかわからないような1日もあった。

各小学校の教員は、体育の時間に何を教えたらいのか、どんな技術をもって体育の授業を行なったらいいのか、暗中模索の状態であり、資料も技術もないため必死である。そのような教師たちのためにも、当講習会での指導技術の公開發表、意見交換は重要であるといえる。

数年先にはニル・サルヴァドル人だけで講習会が開催でき、資料も整備され、指導技術もレベルアップしていくことを期待したい。しかし体

育教育の環境整備という点から考えると、グラウンドの整備や改善の必要性を意識している教員は少ない。表面的な技術を追っているだけの現状を改め、ゴミやガラスの破片がグラウンドから片付けられていく教育的環境づくりを、体育教員はもちろん小学校教員が意識していかないと、体育の時間が単なるスポーツの時間になるおそれがあると思う。

日本に帰って考えること

井 上 孝 一

“ほんとうに自分は現地のために役立ったのだろうか”

帰国して4年目が過ぎる。エル・サルヴァドルの思い出が、年を経るにつれて心に色濃く沈澱してゆく。その沈澱物は協力隊の記事を見るたびに残像として浮かんでくる。だが、その時「私はほんとうに現地のために役立ったのだろうか」との疑問が思い出と並行して湧いてくる。

隊員の多くは、一般の人々よりも、海外の生活習慣にかなり速いペースで融合できるようである。これは派遣前の訓練はもとより、個々の適応力が高いためと考えられる。現地で何年も生活していると慣れが生じて、海外にきているという意識をもたなくなっている。そのような時、隊員が日本の文化習慣を、かたくなに守っていることはまれで、極端には没個的で、現地人以上に現地人的でもある。赴任して数ヶ月は語学力の不足もあって、日本の文化習慣の良さを学生たちに説明できず、授業をやってもしまりがなく、何をしにエル・サルヴァドルへきたのだろうか、何をしたらいいのだろうか、と悩む。

短期間で技術指導を果すには、日本の習慣や、私からすると目に余る彼らのルーズな行為を無視し、開き直った態度、気持ちで接しなければならぬのか、とショックと不安の毎日であった。いつ頃からか記憶にないが、語学力が増すとともに不安も去っていくようである。現地の中へ飛び込んでいくという言葉のとおりであった。ちょうど体育師範学校の宿舎から、街中の下宿に住いを移した頃からだっただろうか。

帰国したての私が最初にとまどったのは、日本の社会変化、仕事のペースの速いことである。矢継早に仕事が待っていて、のんびりということは物理的に無理である。週休2日制、昼寝の癖、そして現地のリズムに慣れた体は、日本に帰ったとたん、大きなカルチャーショックを受けてしまった。さほど現地人的にはなりきれなかった私でも、2年間という期間はずいぶん、私の行動、思考をラテン的に染色してくれたようだ。

帰国当初、かなりルーズだった私の授業も、最近やっと日本的なものになってきた。エル・サルヴァドルのそれにくらべて形式的で、特に規律の面で

はきびしく指導している。日本の習慣を押しつけるわけではないが、もう少し彼らに理解させておけば、後悔や疑問は残らなかったろうと思う。日本できちんとした授業をするたびに、エル・サルヴァドルでやっておけたらと思う。

帰国して数年たつと、日本のカルチャー・ショックは消えてくる。しかし、元の任国にもう一度行ってみたいと思うのはなぜだろうか。

それは単なる観光でなく2年間、3年間というボランティア活動のため、現地に飛び込み、現地の文化習慣を吸収したためではなからうか。

隊員OBの多くは、帰国後もかなり現地的な感覚の人が多いようである。私も急いで仕事を終わらせなければならない時でも、「まあ、あわてないで」などといって、かなりラテン的色彩が脱色されていないことに気づく。

とかく日本人は、閉鎖的集团的国民と評されがちである。現在の日本の文化習慣は多様化の傾向にあり、特に目に見えるところの文化は著しい。あらゆるところに、自らの文化を持ち順応していくことは、人間の広さとなることである。いろいろな文化に接することは、自国の文化を正しく理解することでもある。もし、私が派遣される前に海外生活を経験していたなら、もう少しエル・サルヴァドルの学生にも技術指導だけでない何かを理解させてやれたかもしれないと考える。

私は、私からラテンの習慣、リズムが脱色しないうちに、日本の高校という環境の中で日本の文化を理解し、海外に目をむけられる、適応力のある生徒を育てていきたい。けっして外国文化のいいところをつまみ食いするだけでなく、正しく文化を理解し、評価できる者を養成したい。後輩を育てることは、隊員OBに課せられた、最後の大きな任務であると考えている。



指導中の井上隊員



指導中の井上隊員

井上隊員の報告書を読んで

関 四 郎

このたび協力隊事務局長より、『隊員報告書を読んで』の所懐を求められたので、素直な感想を述べさせていただくことにする。

まず、はじめに、隊員諸君は自分からすすんで協力隊の仕事に入られたとはいえ、気候、風土、言語、慣習などの異なる土地に行かれて、熱心な活動を継続しておられることに対して、そして、それぞれの国情に応じていろいろな困難を克服して普及、指導に活躍しておられることに対して、心から敬意を表するものである。

私は残念ながら受入国から協力隊によせられた感想などは何う機会もなかったが、継続して協力要請があるということが、一片の感謝状よりは確かな感謝の意志表示であると考えられるので、隊員諸君の活動は現地にも受け入れられ、喜ばれていることは間違いないと思われる。今後、一層自重されて精励されるよう切に要望しておきたいと思う。

1. 井上孝一隊員の報告について

(1) レクリエーション指導について

①隊員は体育学校に所属して、5月中旬から学生1クラス15名に毎週1回120分のレクリエーション指導を実施してきていることが理解できた。しかし、内容についての説明が充分理解できない。

すなわち、「具体的には、体操におけるレクリエーション指導、ゲーム指導、集団演技の指導その他陸上競技、ボール運動など体力養成強化的なものから学校行事、社会的行事まで、かなりの項目が短期間ではあったが消化できたと思う」とあるが、体操におけるレクリエーション指導とは何をどのように行なったのかとか、「レクリエーションに体力養成強化的なものが何故必要なのか」とか、学校行事、社会的行事とは何を指すのか、そして短期間で消化したとあるが、当初の計画はどのようになっていたのか、レクリエーション指導で短期間に性質の異なる内容を羅列する意義はあるのかなど、不明な点や疑問点が残る。したがって、計画の良否や指導の適否を述べることもできない。

そこで、今後の報告では、業務内容ごとに簡単に、業務名、対象、実施期間(日)、実習内容、結果と反省などの項目を設けて報告するよう要望する。

②レクリエーションという名称について

現地での用語の使い方に不統一があるのではないかと報告書を読んで感じられる。もっともよい例が報告書に「体育指導をやってもレクリエーションという語を執拗に駆使した」とある背景には、受入国からの要請業務名が体育レクリエーションとあるからと予想される。一般に学校では体育、スポーツの名称が用いられ、社会ではスポーツ、レクリエーションと使われる例は多い。混乱があれば、隊員のほうから要請業務名の変更を申請してもらうよう希望する。

(2) 具体的な活動と問題点について

①業務経過報告について

「エル・サルヴァドル体育学校は、就職状況の悪化によって事業を中断したので、目下、陸上競技協会の主催する競技会や文部省の主催する各種競技会の役員、審判として協力している」とあるが、各種競技会には、いつ、どのような種目があったのか不明なのは残念である。

特に、「この時期に中米陸上競技大会コスタ・リカ大会が開催されたが、出場25人を隊員の手で送り届け、選手を参加させた」ようだが、この時の隊員の職務はどのようになっていたのか、文部省関係者の了解を得られたのか、陸上競技会の組織力の弱さはみられるが、協会の組織と行政との関係にまで手を伸ばすことが業務内容として含まれるか否かについては、隊員の慎重な配慮と受入国との話し合いを切望する。

本年に入ってから業務は小・中学校の体育教員の再教育が決まり、5月上旬から50名ずつのグループで4週間実施するようになったようであるが、ここでも、この期間の指導目標、内容、実施方法など活動計画が述べられていない。ただ後述の項で「技術指導の伝達が理想的な形で行なわれている」との報告からみると、非常に良く実施されているとみて差し支えないはずであるが、同じ項目のなかの「体育学校の施設は発足時と比べて改善がなく、用具もほとんど購入されない……」との状況報告からみると、前述の指導技術の伝達が理想的であるとの報告には疑問が残るし、まして隊員のつくった指導資料に学校職員が目もくれないようなことでは、再教育教員は何をもとに指導されたかもわからない。

2. 隊員諸君に対する希望

(1) 報告書は、内容項目を整理して、理解し易いように書くこと。

(2) 行政にたずさわる人には、施設、用具、指導資料の整理などの必要性を充分説明し、準備してもらうよう努力すること。

(3) 日本式の体育指導は、もし受入国の人に受け入れられないとすれば、問題となる点は何か、体育は本来国民性の違いに左右されないはずであるから、何が問題かを検討し、練習中に煙草を吸う、水を飲みに行くなどの事項は、充分理由を説明して、少しずつでも、なくしていく方向を目指してほしいと考える。

(4)公開授業の実施に当って

国が異なっても為政者は、「こんな新しいことを自分が企画してやったのだ」と誇示したがる。これは今の日本でも行なわれている。隊員諸君は、適切な指導案とはいえなくとも、それを用意して、授業は目的をもち、計画的に指導するという姿勢で臨むことと、このことを集まった先生方には授業後、必ず説明する必要がある。また、指導した内容やその取り扱いを、対象や目的に応じて変えるなども、あわせて説明することが必要である。なお、屋外指導の場合、生徒にもよく説明して安全な場所となるよう協力させるなど、地道な指導の公開をお願いする次第である。(協力隊技術専門委員)

日本語教育の現状と問題点

中間・総合報告書(昭和50年5月28日)
(昭和53年12月22日)

派遣国 エル・サルヴァドル 49年2次後期組
職 種 日本語
氏 名 加 納 正 康
配 属 先 外務省調査研究局, 文部省
サン・サルヴァドル

加納隊員の略歴

氏 名 加 納 正 康
生年月日 昭和25年8月24日
出身 県 千葉県
職 種 日本語
派遣期間 50年4月～53年12月

I 外務省の一般公開講座等を受けもって

1. 任務内容

私のエル・サルヴァドルでの任務は、1975年5月16日付のサ国外務省との契約では、サン・サルヴァドルの公務員及び外務省の職員に、月曜、水曜、金曜の午前9時半より11時まで日本語を教授するというものであった。しかし実際には、それだけでなく、サ国外務省主催の一般市民公開日本語講座も受けもち、現在に至っている。また正式要請任務以外にもエル・サルヴァドル国立大学人文学部語学科で日本語を教授してきた。

2. 業務の進捗状況と反省

外務省内の一般公開講座は、昨年度に引き続き、今年度も2月16日から開講しており、入門クラス(週5回、午後6時より7時まで)と、初級クラス(週5回、午後7時より8時まで)を担当している。今年度の新規受講生募集方法については、受講希望者の殺到が予想されたので新聞広告を行わず、外務省から官公庁へ招待状を送るという形で募集した。その他、直接クラスを訪ねてきた一般市民にも門戸を開いておいた。開講当初、入門クラスの受講生は70名以上(公務員40%、学生その他60%)であったが、3ヵ月後の現在では30名ほどが受講している。今月中に、NHKラジオジャパンのスペイン語版の日本語の教科書、『Vamos a Aprender Japonés』(これは私が在サ国日本大使館を通じてNHKに100部要請したものである)を一応修了する予定である。このコースを修了すると、通常使われている日本語の講文はだいたい習得したことになり、文字の方も『かな』は書けるはずである。

初級者の方は、昨年度よりの受講生(主に学生、会社員その他)20名ほどが、2月16日に初級コースを受講し始めたが、現在では8名前後が定期的に受講しているだけである。このコースは昨年度末までに、前述のVamos a Aprender Japonésを修了しており、今年度からは携行した大阪外大の『JAPONÉS BÁSICO I』を使って、ローマ字書きのテキストを『かな、漢字まじり文』に書き直しながら授業を進めている。現在までに約250の漢字を提示している。このように私が、かな・漢字に重点を置いているため、受講生の中には、目新しい、珍奇な文字を覚えることに抵抗する者もあり、途中で止めてしまう者もあること

は事実である。しかし、現在出席している初級者の大半は、すでに漢字の重要性を認識しており、日本語学習に多大なる熱意をもっており、日々研鑽している。

正式任務以外に、エル・サルヴァドル国立大学の人文学部語学科で、一般教養の外国語として、昨年12月8日より『日本語基礎Ⅰ』を開講している。受講生は、正式登録者11名、聴講生8名。今月の初め学期末試験を行ない、登録者のうち7名を合格させ、4単位を認定した。当大学での日本語の授業は、週4回、各2時間。それも午前中の学習しやすい時間なので、かなり速い速度で日本語を習得しているようである。次学期（7月より11月まで）に『日本語基礎Ⅱ』を開講することも、すでに決定されている。

一方、フランススコ・メネンデス国立高等学校観光科の生徒に対して開講していたコースは、1月をもって終了し、その後、受講希望者に対しては、外務省での一般市民講座の方で教授している。3月時点で新駐日エル・サルヴァドル大使モラレス氏と懇談した時、同氏の意向では、「日本へホテル実習をするために実習生を送る計画は継続したい」とのことであったが、現在まで何の連絡もない。

私の一般的感想であるが、日本への1、2年ぐらいの短期留学は、あまり効を奏していないのではないか。言葉の問題があり、さらに技術を習得しなければならないということは、一般的に考えられているような安易なものではないらしい。また帰国後の元留学生の活動状況をみても、留学経験を有効に活かしている例はあまりみられないようである。こういう面からも、短期留学というものは再考する必要がある。

3. 将来の予定

サ国外務省における日本語コースは、今年度いっぱい一般公開講座という形で続けていき、業務計画報告書に予定したように、学習速度の速い受講生には、日本の小学校卒業程度の表現力・読解力を目標としている。同時に現在、当国の人々は、日本の商品のことはよく知っているが、日本のことについては無知に等しいので（関心がないのかもしれないが）、引き続き日本について、折に触れて紹介していきたい。そういう意味で毎週金曜日を文化の日と銘打って、書道、映画、スライド、折り紙、生け花、茶等を紹介していくつもりである。

日本語教育の現状と問題点

私の任期中の将来については、現在、所属機関である外務省とも業務上何ら問題はないが、私の任期満了後のサ国外務省での日本語講座には問題があるようである。直属の上司である外務省調査研究局の Dr. エリクス氏との懇談においても、「今のような一般公開市民講座的な日本語教育は、建前からいえば、文部省の管轄であるはずである」とし、それにもまして「日本は何故にサ国に日本文化センターを設立しないのか？米国、フランス、ドイツ、イスラエル等は皆、もっているではないか。そして、その日本文化センターの活動として日本語や日本文化の紹介を行なったらどうか」とのことである。この意見は、その後、外務省海外局長、日本担当者であるホルヘ・ベネケ氏との懇談においても強調されているところである。

また大使館のサービス活動として行なうことも当然考えられ、上記のセンターの他、私の知っているところでは、イタリアやブラジル大使館が、それぞれイタリア語、ポルトガル語のコースを開講している。

では、今後、当国において日本語教育を行なう際の所属先としての可能性を列挙してみる。

まず協力隊を通し、現地政府の一員として日本語教育を行なう場合、

- (1) 現状維持の外務省内
- (2) 文部省内（例えば、青少年スポーツセンター内、大学その他）
- (3) 観光局内

次に協力隊を通さずに、新たな日本語コースを考える場合、

- (1) 大使館内の文化事業の一環
- (2) 日本文化センターを設置し、その活動の一環
- (3) サ・日協会を設立し、その活動の一環
- (4) 大学での講座
- (5) 私立語学学校での講座

以上のような可能性が考えられるが、前述の外務省の諸氏の考えにもうかがわれるように、日本語教育という活動は、当国においては、もちろん学問的な研究ということも含まれるが、多分に日本国の文化的サービスの要素が強いように思われる。「GNP 2 位という経済大国の日本ならば、そのぐらいの文化サービスをすることは当然であり、それをしないことは、かえって正常ではない」とする考え方が大

勢である。日本国政府が音頭をとって日本文化紹介をすることは、日本の文化的帝国主義につながるという懸念は、戦後の日本政府のひとり合点であるといえよう。当国などでは、甚には自動車、電気製品、日用雑貨その他日本製品が氾濫しており、現地人には否でも応でも目に入るのが日本製品なのである。「どうして日本という国は戦後、こんなに物質的に豊かになったのか。こんなに物質的に豊かな国の言葉を知っていれば、これからの人生にとって何かの利益になるだろう。日本語の学校で勉強してみたい」というような考えの人々に対して、日本政府がその機会を提供することは、少しも文化的帝国主義などではなく、それこそ金銭的に富める国としての当然の義務であろう。それをしないことは、逆に「日本は東洋の孤島で、自分たちだけで何かずいことをしているのではないかと、他国の人々に思われかねないのである。こういう意味では、日本の外交姿勢、外務省の外交方針が問われるのである。

結論的にいえば、サ国政府が、外務省の職員に日本語を教授する日本語隊員を要請した当時と、現時点とでは、事情が異なっている。現時点では一般市民が対象になっているため、協力隊員が現地政府側に入ってやるよりも、大使館または日本政府の直接のサービス機関がやるべきであろう。

こういう認識のもとで私は、さる5月10日、林裕一日本特命全権大使と懇談したが、「現時点においては、日本文化センターを設置することや、大使館の文化部の活動の一環として日本語コースを開く考えはない」とのことであった。理由としては、「日本人学校もできていないし、日サ協会もできていない。やるにしても場所がない」とのことと、サ国大学の要請にもとづいて私が自主的に活動しているサ国大学での日本語コースに力を注いでどうか、ということであった。

次に、大学での日本語コースであるが、語学科のボランティアの外人講師は、私とフランスのミッション1名とアメリカの平和部隊2名の計4名で、後述するような、この国のミッション過剰現象からみると非常に少ない。この事実が何を意味するか、考えてみなければならぬと思う。事実、まだ日本語コースを始めたばかりなので、なんともいえないが、私としては、国際交流基金を通じての純粋な学問レベ

日本語教育の現状と問題点

ルでの教授の交流及び日本語教師の派遣を要望したい。それには、ひとつの国の学問の中心である大学の講師としての資質及び経済的裏づけが必要であり、日本語教育、日本文化の真のエキスパートが望まれるからである。

以上、私の今後の日本語教育に対する希望を述べたが、サ国外務省の一般市民日本語講座にしる、大学の日本語講座にしる、私に対する受講生からの滞在延長要請には強いものがあるので、私としても思案中である。

4. 相手側の協力

前回も報告したように、通常業務における外務省側及び大学側の協力は、すこぶる良好である。現地政府の支弁する私に対する生活補助金（月額 160・58 コロン）も、今年度初め、外務省が出すか観光局が出すか検討されていたようだが、6月現在、外務省から受領している。

ところで、当国における今後の日本語教育のありかたについての指針を得るために、前々から「6月ごろメキシコシティにおける日本語教育、文化紹介、研究のありかたを視察したい」とサ国外務省筋に打診していたが、2ヵ月以前には「交通費をもちましよう」という快い返事があったのだが、実際には予算的余裕が皆無ということで、自弁視察旅行になりそうである。現地の日本大使館にも打診したが、関心がないのか予算的に無理なのか、返事は「NO」であった。

5. 問題点

一般的協力奉仕活動という面からみると、この国ではミッション過剰現象がみられるようである。アメリカ、フランス、ドイツ、イタリア、スペイン、ブラジル、アルゼンチン、日本……などの国々からミッションが送られている。分野もホテル学校、観光学校、民芸品開発、体育学校、芸術学校、工業学校……等、広範囲にわたっている。そして、これらの学校等の設置に際しては、一部の政府高官レベルで話がつくと、一方的にミッションを導入して、ある形を形成してしまうようである。こうしたサ国政府または国民の姿勢は、前回報告で、大学生の留学指向型を指摘したように、非常に問題があるように思われる。あまり自助努力をしないで、簡単で、性急にできるものに、すぐ飛びついてしまう。この傾向は、ラテンアメリカ諸国が地道に真の独立を獲得するうえでは重要

な問題であり、かつ南北問題への北側の協力形態のあり方が問い直される必要があるのである。

一般国民の立場からみると、私の体験では、想像できないことであるようだ。なぜなら、外国人がきて、あまりうまくないへんてこりんなスペイン語で専門技術のことを得意になってしゃべっている。あるいは、だまって何かをつくっている。そして、2年ぐらいうると帰っていき、また他の人がくる。それが少数ならば、希少価値があるかもしれないが、群れをなしていたすると……。

こういう意味からいっても、当国に関しては、これからの協力関係は益よりも質の向上を目指すことが望ましい。事実、この国の知識人の情報量及び情報伝達速度は、地理的にアメリカ合衆国に近いこともあるかもしれないが、日本とあまり変わらないようである。ただ、それが、いかに一般民衆レベルまで伝わるか、ということが問題なのである。その点については、当国自らの意識の問題で、当国自身の手で解決する必要があるように思われる。

次に、エル・サルヴァドル国の首都サン・サルヴァドルにおける生活及び経済的状況であるが、現在、私は、事務局より月々170ドル、現地政府より64ドル、計234ドルを支給されている。これから下宿代50ドル、食費50ドル、交通費50ドル（私の場合、仕事の関係上、車を使用）の計150ドルを差し引くと、残りは84ドル。これで受講生とのつきあいや同僚とのつきあいなどの交際費、娯楽費、世帯費等をまかなわねばならないので、月々赤字続き。旅行のための貯金などは考えられない状況である。もちろん、もっと生活レベルを下げ、当地の中流以下の人々と全く同じような生活をすれば話は別だが、よい仕事をするには、それなりの環境、エネルギー、カロリーが必要であり、上記のような私の生活は決して贅沢な生活ではない。もちろん現地の中流以下の人々に比べれば贅沢ではあるが。

こういう状況なので、もし現地政府が生活補助金を支払うというなら、制限を設けずに受けとれるような体制でありたい。外務省では昨年末までの月50ドルの生活補助金を、今年度は月80ドルに引き上げようという意向であったが、協力隊の調整員の私への通達で月64ドルになってしまっている。聞くところによれば、当地の他の隊員の中には、今年度

日本語教育の現状と問題点

から月80ドル受けとっている隊員もいると聞く。当地における生活は都市生活であり、また特に人の前に立って教えるという職業が大半であるので、意外に生活費がかかる。現地政府が生活補助をしてくれるというのならば、そこに制限を設ける必要はないように思われる。もし他の職場にいる隊員とに差ができ、いちじるしく不公平になるようなときは、しかるべき分配なり、補填を事務局の方で考えるべきであると思う。この考え方の基本は現地の自助努力促進からきている。

次に正式要請任務以外に現地の直属の長の承認を得てやる特別活動に対しては、交通費等の実費以外は、いかなる謝礼をも受けとってはいけないというのが、協力隊の調整員からの通達であるが、この事項にも問題があるように思われる。隊員は当地に営利活動にきているのではないことは明白なことであるが、仕事が増えれば増えるほど生活に余裕が必要なのであり、どちらかに片寄せると、そのバランスがくずれ、生活が乱れるものである。

II 国立高校での日本語コース等

1. 所属機関の変更

今年度（1977年）2月1日をもってサ国文部省に私の所属が変更された。文部省からの私への要請は、サ国の学生及び教職員等に日本語を教授するということである。そして正式要請任務以外に、サ国国立大学の学生とサ国観光局の職員に日本語を教えている。

2. 業務の進捗状況と反省

今年1月まで続いたサ国外務省内の日本語一般公開講座は、入門コース（24名、計24週、約70時間）、初級コースA（10名、計43週、約130時間）、初級コースB（3名、計60週、約180時間）の各コースを修了した。受講生のうち約50%が学生で、その他は教職員、公務員、会社員等であった。

テキストは、入門コースには私のプリント、初級コースには大阪外大の基礎日本語Ⅰ、Ⅱを使用した。入門コースでは、いっさいローマ字提示はしないで、国際学友会編の「正しい日本語」を骨子として私がプリントし、数、日付、挨拶、動詞「です」の構文、一般動詞の現在形、過去形、疑問詞を使った応答、進行形、状態描写、形容詞等の修飾、比

校, 欲望願望の応答, 能力の表わし方等, 項目的には「正しい日本語」全40課のうち, 30課以上を修了している。初級コースAは大阪外大の「基礎日本語Ⅰ」を修了し, 初級Bコースは「基礎日本語Ⅱ」の第32課を学習している。

昨年の暮からサ国外務省の直属上司, ウリセス・ベレス氏から, 「現行の日本語教育の活動意義は多大なものがあり, 素晴らしいことではあるが, そのような教育活動は外務省の管轄ではない」として, 他の管轄への所属移管が検討されていることを伝えられた。そして今年1月末に文部省への所属先変更が決定された。その後, 日本語コースの設置場所と対象に関して文部省の総務部長, ナポレオン・エフライン・ゴンザレス氏と中高等教育部長, オスカル・レネ・モレノ氏と協議した結果, ヘネラル・フランシスコ・メネンデス国立高校に開設することになった。そして対象学生は, 当国の高校生が主体で, その他外部からの希望があれば, 私の許容能力の範囲内で受け入れ可能ということになった。その後, メネンデス高校の副校長, マリオ・アギレス氏と日本語コースのことで懇談したが, 当高校における日本語コース設置を快諾された。また当高校生の中からの受講者の選抜を引き受けてくれ, 3年計画で日本語を受講させるべく, 35名の高校1年生が受講希望者の中から選抜された。

2月14日より, 以前の外務省での入門コースと初級コースAの者に月曜から木曜まで毎日, 午後7時から8時まで, 初級コースBの者に8時から8時30分まで授業を開始した。また2月21日からは新しい受講生に対し月曜から木曜まで毎日, 午後6時から7時まで授業を開始した。授業内容は, 最初の2週間は文字を使わず, 日本語の音声になじませた。その後は大阪外大の「基礎日本語Ⅰ」にそって, 私がプリントして授業を進めていく予定である。詳細な3年間分の授業計画は現在作成中である。新受講生の内訳は, メネンデス高校の1年生35名と外部からの受講希望者約15名で開始したが, 前日の大統領選挙の煽りを受け, 2月23日にはバスの運転が中止され, 必然的に高校も休校となった。さらに2月28日には, 3月30日までの非常事態宣言が出された。それにもかかわらず3月7日から授業を再開したが, 出席率は100%に近かった。

正式任務以外に, エル・サルヴァドル国立大学人文学部語学科で, 1975

日本語教育の現状と問題点

年12月から1976年5月まで「日本語Ⅰ」を開講し、7月から11月まで「日本語Ⅱ」を開講した。「日本語Ⅰ」の方は、前回にも報告したとおり、11名の正規登録者のうち7名に4単位を与えた。そして「日本語Ⅱ」を開講したところ、学部間の教育課程の違いから、「日本語Ⅰ」をとった学生のうち正規登録ができたものは1名しかいなかった。その他の5名の受講希望者は聴講生という形になってしまい、以前の聴講生と合わせて10名で授業を行っていた。

学内は、7月からは農地改革の問題、10月からは学費値上げの問題で動揺していたが、「日本語Ⅱ」は朝7時から9時までの早い時間帯だったためか、学生集会や教授会の影響で休講することもなく、予定どおり11月5、6日に期末試験も行ない、語学科長へその結果を提出する段階まで進んでいた。しかし、11月18日に、突然、大学の完全閉鎖が学長より宣言された。学生はもちろん、教職員も学校の構内に入ることが禁止された。犬猫1匹たりと入構させないという厳しいものだった。大学長、カルロス・アルフレッド・カスティーヨ氏の説明によると、大学のガードマン1名が白昼何者かに殺され、奨学金室、事務本部などが一部破壊されたこと等が、その理由であるとしている。この閉鎖状態は現在も依然として続いているが、今年1月に入ってから一部の教職員が呼び出され始め、特別な身分証明書を発行されて、入構が認められ始めた。私も1月31日、語学科の講師の中では3番目に呼び出され、入構が認められたが、まだ何もすることがなく、事態を静観しているところである。

昨年11月18日に大学が閉鎖された後、昨年内は、日本語の授業を希望していた学生10名に自宅及び日本大使館文化教室で週2回、8時間の授業を続けた。今年に入ってから、サ国国立大学で同僚であったマルセチニ女史の好意により、近代言語学校の1室を無料借用して日本語コースを継続している。

現在閉鎖されている国立大学の閉鎖解除の見通しについては、2月20日の大統領選挙後、新聞紙上で、今年度の学科登録及び授業料の払い込みが2月23日から各市中銀行を通じて始められる旨の発表が行なわれた。この発表内容は奇妙なもので、昨年、学科登録料が10コロンから25コロンに、授業料が月10コロンから月所得段階別の10コロン～70コロン(平均40コロン)に値上げされ、現に昨年すでに70コロンを払い込んでい

る学生が存在しているにもかかわらず、今回の発表では、値上げは学科登録料だけにとどめられ、授業料は月10コロンに据え置かれている。ともあれ学費納入が開始されたので、大学再開も近い将来のことと思っていたが、2月28日、向う30日間の非常事態宣言が立法議会で決定された。憲法で保証されていた言論の自由、出版の自由、通信の自由、及び集会の自由がなくなったので、3月中の大学再開の見通しはなくなり、早くても4月の復活祭後ではないかと思われる。そして今年度の新学期の開始は、7月の新大統領就任式以後ではないかと予想される。

次に昨年7月からサ国観光局において開始した観光局の職員に対する週2回、4時間の日本語コースは、現在は受講者4名であるが、継続している。なお昨年7月から12月までは、現地政府側支弁の住居補助費、月165コロンは観光局より受領した。今年度2月からは文部省より月額200コロンを受領する見込みである。

3. 展 望

当国における日本語教育については、前の報告書で、今後の見通し及び可能性を示し、その後、関係各方面の反応を見守った。今回、サ国文部省からフランシスコ・メネンデス高校での長期的展望にたった要請があったので、このコースを成功させ、ぜひ高校の正規の学科として外国語の選択科目の中に日本語を組み込めるような状況にもっていきたい。

サ国大学での日本語講座については、去年は学部間の教科課程の違いから登録の際に問題が生じたが、この問題も、大学改革問題の一環として、改革の試案を学長に対して提出したい。語学科としては語学センターの設置が懸案事項であり、講師、予算面で経済発展国の協力が考えられるので、主体的にこの計画に取り組みたい。

ところで、現状のシステムのままだも人文学部の学生、特に教育学科、哲学科、社会学科、文学科、心理学科、生物学科、新聞学科等は、外国語を英語のみと限定せず、8単位または12単位を必要習得科目としているので、これらの学科の学生に対して少し情報を流し、サ国大学卒業後、メキシコのコレヒオ・デ・メヒコに留学させ、ゆくゆくは筑波大学へ留学できる可能性があることを伝えれば、日本語選択の学生は激増するであろう。語学科の専門科目として、第2外国語集中コースを3学期にわたって18単位で出すことも考えられている。また法学部の国際関

係科での開講も考えられるが、まだ具体化はされていない。

以上は、大学において日本語の専門家を養成することではなく、一般学生に日本語を習得させることを念頭にした計画であるが、サ国において、将来にわたり日本語が外国語としての『市民権』をもつかどうかは中高等教育機関において、日本語が外国語科目の中にとりいられるかどうかにかかっている。そうした場合、サ国人の日本語教師の養成が必要である。そうなれば現在の語学科の唯一の英語学士養成コース（5年）の他に、日本語学士養成コースの設置が必要とされるであろうが、現状は、フランス語、ドイツ語でさえ学士コースがないので、なかなか難しい状態にある。しかし将来の当国における日本語教育の発展を考慮すれば一考の余地があるであろう。

サ国観光局でも日本語教育の要請があり、時間的余裕があるかぎり、続けていきたい。

ところで、まったくの一般市民に対する日本語コースについては、在サ日本大使館に再三その意向を打診しているが、いまだに建設的な回答は得られていない。前回にも報告したように、当国の親日性には多大なものがある。日本から種々の視察団がこの中米の小さな国を訪れるが、その親日ぶりに驚嘆して帰っているようだ。最近の大型経済視察団の永野重雄団長の話聞いてみても、しかりである。これだけ親日状況にあり、また一般市民からの日本語コース開設の要望も高まっているので、在外公館のサービス活動として日本語講座を開設することが望まれる。

サ国においても、在留日本人の子弟に対しては日本人学校設置が問題となっているが、教育文化相互交流法に基づき現地人との相互理解の場として運営されているアメリカンスクールやニスクエラアレマンやリセオフランセス等の学校方針とはかなり異なるようだ。日本人学校の主眼は日本人の子弟が日本に帰った際、知識の遅れをきたさないために日本と同じような学校を創設することにおかれているようである。日本の教育水準が素晴らしいなら、それを現地人の子弟と分かちあえるような学校を、なぜ考えないのか。日本語を現地人の子弟と共に学習するという意識が、なぜ起きないのか。ここらへんにも日本人の言語観というものが如実に反映されているように思える。ただニル・サルヴァドルの場合は、まだ現地の高等教育の場で日本語を正規の学科としてとりいれている学

校は皆無であり、状況的には時期尚早かもしれない。しかし国際化時代に生きる日本人としては、それぐらいの展望をもって事にあたるのが当然であろう。

次にサ日協会の活動の一環としての日本語コースの件は、外務省の日本担当のホルヘ・ベネケ氏には、その意向があるようだが（私はまだ実際に協会の人々と会談していないので、何ともいえないが）、可能性は充分にあるように思われる。

4. 任期延長及び後任隊員要請について

今年2月中旬、サ国文部省から高校生を中心に3年計画での日本語教育の要請があり、文部省から私に対し任期の1年延長と後任隊員要請の話があった。私の意向では、任期を1年延長し、当地における日本語教育のさらに一層の基礎固めをしたいと望んでいる。

以下、私の任期延長要請が遅れた理由を述べる。私の着任当時、外務省での日本語コースは、派遣要請内容であった「当省の職員に日本語を教授する」という状況とは異なり、一般市民を対象とした日本語講座であった。その後、私は、要望さえあれば、外務省の職員に対し、いつでも特別コースを行なう意向のあることを直属上司に伝えていたものの、特別コースの要望は一度もなかった。外務省の職員のうち「日本語を本格的に学ぼう」という気力のある人間が1名もいなかったことは事実であり、逆に一般市民からの要望が殺到した。こういうわけで、日本語コースが、協力隊員が現地政府サイドに入って行なう活動というよりは、日本政府または日本人自体への直接サービスという形に近かったので、日本大使館等の回答を待っていたのだが、それが延び延びになって現在に至っている。

サ国大学人文学科からは、国立大学の給与体系を考慮して、「協力隊の月234ドルというのは、当大学の専任講師の初任給、月550ドルと比べて、あまりにも低すぎるので、国際交流基金から派遣してもらってはどうか」として、昨年11月に人文学部長名で、名指して私が協力隊員としての任期を終了後、国際交流基金から私を再派遣することを日本大使館へ要請したらしいが、まだ私に対して連絡がないまま現在に至っている。以上のような状況にあったため、私の任期延長の決断が遅れ、後任隊員の要請が遅れた。

5. 後任隊員の資格

原則的には男女どちらでもよいが、授業の時間帯が午後8時から9時に及ぶことがあるため、そのことを承知している必要がある。日本語教育を専門とし（私の着任以前、素人が日本語教育を行っていたため、日本語に対し現地人に偏見をもたれた感なきにしもあらず）語学教授法や言語学に精通し、かなりスペイン語の能力がある者が望まれる。もちろん日本文化に対して深い造詣をもち、広い趣味をもつ者が望ましい。

6. その他

私が赴任してから外務省で共に勉強し始めた者のうち7名が現在でも勉強を続けており、中には、すでに漢字を500以上覚えた者もいる。そして現在では70名以上の受講生をもち、日本語を教授しているので、私の仕事に対する精神的ストレスはない。

最近訪サした日本の大型経済視察団の通訳として当国へこられた、日本スペイン協会の古川武司氏は、50年間もスペイン及びラテンアメリカの勉強をしていると、「外国人の目で日本が見られるような気がする」といわれていたが、真の国際理解というものは、まさに同氏のいわれるようなことであろう。当エル・サルヴァドル国にも、真の意味での日本理解者が増えるように、私も日夜努力している次第である。

海外手当の件については、ここ首都サン・サルヴァドルのインフレは、歴史始まって以来のひどいものだそうであり、国内積立金を減らしてでも、海外手当を増額してほしいものである。

Ⅲ まとめ

1. 任務内容及び実態

1975年5月16日付のエル・サルヴァドル国外務省との契約は、サン・サルヴァドルに在住する公務員及び外務省の職員に月、水、金曜日の午前9時半より11時まで日本語を教授できるように準備し、かつ教授するということであった。しかし、着任したとき、外務省で行なわれていた日本語教育は、学生・社会人等を対象にした公開市民講座の形で行なわれていたので、それを引き継いだ。このコースは1977年1月30日まで続いた。その後エル・サルヴァドル国文部省へ所属が移管され、1977年2月1日より1978年9月11日まで GENERAL FRANCISCO MENENDES

国立高等学校で、応用実務コースと公開市民コースの中で日本語のクラスを担当した。

正式要請任務以外に、1975年6月3日より1976年1月31日まで GENERAL FRANCISCO MENENDES 国立高校の観光学科の生徒に課外授業として日本語を教授した。また1975年10月20日よりエル・サルヴァドル国立大学人文学部語学科において基礎日本語コースを始め、1977年6月まで続いた。その後、同大学の語学センターで7月15日より1978年9月26日まで日本語Ⅰ～Ⅳを教授した。また1976年7月より1977年7月までエル・サルヴァドル観光局において同局員に日本語の初歩を教授した。なお、サン・サルヴァドル日本語補習学校中等部の国語を毎週土曜日の午後、2時間担当した。

総授業時間	外務省	600 時間
	GFM高校	800 〃
	大学、語学科	400 〃
	センター	800 〃
	GFM観光科	150 〃
	観光局	150 〃
	計	2,900 時間

日本語受講者数 (名)

場 所	受講時間	50時間未 満	51~100	100~150	151~200	201~250	251~300	300以上
	外 務 省	90		15	13	2		
G F M 高 校	51		3	4	25	2	8	8
大 学 語 学 科	12				13		6	3
センター			4		8		6	3
GFM観光科	50		15	10				
観 光 局	20		6	4				
計	223	223	43	31	48	2	20	14

総 計 331 (名)

日本語教育の現状と問題点

使用教科書

外務省	プリント, ラジオジャパン, How to use good Japanese, Japone's Basico
GFM高校	プリント, Japanese for Today, Japone's Basico, Writing Japanese, 物語り
大学語学科 センター	Japanese for Today, ラジオジャパン 早稲田大学の初級日本語
GFM観光科	プリント, Japone's Basico
観光局	プリント, ラジオジャパン, How to use good Japanese

日本紹介フィルム上映 63本
書道指導 約80時間
レクリエーション, 日本文化紹介, 日本人との会話 約120時間

以上が3年半にわたるサ国での日本語教育の概略である。

2. 反省, 問題点及び今後のサ国における日本語教育への期待

まず第1に反省すべき点は、日本を、日本語を、また一日本人である私を、できるだけ多くのサルヴァドル人に知ってもらいたいと願うあまり、手を広げすぎ、中途半端に終わってしまったところが多々あったことである。1人や2人の日本語の専門家を育てあげるのなら、なにも協力隊員がサ国へ赴かなくとも、サ国の若者を日本へ招聘した方が手っとり早いかもしれない。それも一理ある。しかし現実には、サ国では日本のことをほとんど知らない人が大半で、多くの人が日本のことを知りたがり、日本語を習いたがっていたので手を広げてしまったのだが、量と質のバランスをとるには、1人では少し無理であり、チームで日本語教育に当らなければ、良い成果はあがらないのではないかと思われる。その点、大学の語学センターの所長であったマリオ・カセレス氏は卓見の持主で、住宅手当を他の所よりも200ドルでも300ドルでも多く出すから、ぜひ4名ぐらい日本語教授を迎えられるようにしてくれ、などと話していたが、1978年8月11日、衛藤蓑吉氏がサ国大学を訪れ、会見したその翌日に、元の人文学部語学科長の怨みを買って失脚し、エル・サルヴァドル大学創設以来初めての試みであった語学センターは、元の人文学部語学科に戻り、一睡の夢となってしまった。今、考えてみると、なぜマリオ・カセレス擁護運動を起こさなかったのかと悔やまれる。

その後、人文学部の語学科長から私に、私の後任の要請があったが、マリオ・カセレス氏のような、チーム派遣の要請ではなく、私の後任の要請であった。語学科長、人文学部長、学長の大学での語学教育に対する方針が明らかでないので、学期を終了させるための後任は勝又女史の同意を得てやることになったが、その後のことは、語学教育に対する方針が明らかになってから対処の方がよいように思われる。ただ注意したいことは、諸外国は言語普及に大変熱を入れているということであり、何もしないでいると諸外国に圧倒されて、3年間続けてきた日本語コースを失うことにもなりかねないので、日本大使館ともども充分配慮しなければならぬと思われる。

現在の正式要請任務であるGFM高校の日本語コースは、高校生のための実務応用コースでもあり、また学外の人々のための自由クラスでもあるので、ここをサ国における日本語教育の根城にすることも十分に考えられる。このGFM高校は、前大統領のモリーナ氏の母校である。モリーナ氏は在任中、中米一の近代的な新校舎建設を成し遂げた。実際1978年5月には新校舎に移転しており、朝間部、昼間部、夜間部合わせて3,000人の学生をかかえている。昨今、この3,000人の多くが大学進学を望むようになった。もちろん全国に170近い高等学校があり、高校生の大学進学が社会問題になっている。大卒と大卒でない人の社会的、経済的地位が非常に異なるので、こういう傾向が生じるのであろうが、それよりなお重大で深刻な問題は、近代化、工業化、産業振興のための技術をもち、教育があり、適応力のある若者の養成なのである。そのため、この国では以前から普通科の他に、工業、農業、水産、師範、美術等10種に及ぶ特別高校があるが、それらにしても大学進学熱が高まるばかりである。その傾向は特に首都部で顕著である。1978年よりGFM高校では実務応用コースを設け、タイプ速記、洋裁、美容、製図、語学の科目を出している。これらのコースは一般市民のための自由クラスももっている。「1980年までには22コースを用意したい」とマリオ・アギラ校長は語っていた。この実務コースは、段階的に高度な技術まで習得できるように計画されている。日本語教育もこのコースの中に入っているもので、国際会議通訳、観光ガイド、秘書、翻訳等の実務で通用することが要求される。これに関連して、海外に進出している日本人の日本語観を

日本語教育の現状と問題点

考え直してみる必要があるように思われる。海外で日本人は日本語を使いたがらない。そして流暢な日本語を話す外国人を見ると、「犬が言葉を話している」と感じるという日本人もいるぐらい、外国人が日本語を話すことに抵抗感があり、「現地に日本語を知られると機密が守れなくなる」などという人もいる。こういう人は考え方を改めてもらわないと、日本人は自分たちの言葉だけで、いつもこそこそと何か悪いことを相談しているようにとられても仕方がない。また外国人が日本語を勉強しようという動機づけにもならない。日本語ができる人は一般の人より高給で雇うぐらいなことを、海外の日本の企業はする必要があると思われる。

また、日本語を教える方も、その目的に応じて、ただ単に日常会話ができるようにするだけでなく、新聞が読めるぐらいの力をつけてやる必要がある。

エル・サルヴァドル国においては、日本大使館サイドで日本語講座を開く意志はまったくなく、サ日協会も有名無実であり、日本の国際交流基金にしても関心は薄いようだ。協力隊が頑張るしかないのが現状である。私が手広く活動したのが功を奏したのかどうかかわからないが、幸い受講生の間から、「日本語を学んだ者、あるいは学んでいる者の集まりをつくりたい」という話が出、今年12月に正式に会長、副会長、理事長を選び、公式の法人組織として「日本語学生の会」というのができるそうである。日本語を3ヵ月以上学んだ人、または学んでいる人が会員の有資格者で、日本語のクラスを援助したり、諸行事を行ったり、奨学金のことなども考えて、日本との相互理解を深めるそうである。この会は私が求めたものでもなんでもなく、日本語を勉強したサルヴァドル人たちの意志によってつくろうというもので、私としても喜びにたえない。これからは底辺の拡大もさることながら、一層密度の濃い日本語教育をやってほしいものである。

3. 国際協力の問い直し

インシンカ社への日本からの出向社員の2度の誘拐事件と、スウェーデンのエリクソン社、英国の中南米ロンドン銀行、オランダのフィリップス社の社員の誘拐事件は、同一のグループの犯行とされている。そして12月2日、日本経済新聞に載った犯行グループの布告によると、最小

限の民主的自由が得られるか、イスラエル、英国、西独、日本などの国々が、ロメロ政権への援助を止めるならば、外国人企業家の誘拐を止めることを確約するとしている。エル・サルヴァドル政府または、これらの国々が何らかの処置をとらなければ、組織だった犯行グループだけに、このような事件が続くのではないかと心配される。犯行グループの布告文等を見ていると、いわゆる諸外国の援助というものが、政府及び一部の者の利益にしかならず、一般人民はますます抑圧され、搾取されるとし、このような援助は止めてもらいたいとしている。これは“金さえ与えれば” 式の援助を痛烈に非難したものであり、まったく否定できない面も現実にあるのではないかと思われる。一方、英国のサルヴァドル国に対する教育援助まで「NO」としている点など、現実を認識していない点多々ある。これから日本の会社はますます海外へ進出して行くであろうが、良識のある行動をとるべきであろうし、また、とらなければならない。しかし慣習の違いや個人的感情等で摩擦が起きたとき、自分たちのやっていることを正しく相手に理解させることができるような人間が、真の意味での国際感覚をもった人であり、そのような人が、これからますます必要となるであろう。

進出企業としては、協力隊方式の草の根的進出とか、地域社会への還元などは考え得ないであろうが、さりげない普段からの広報活動なども重要ではないか。また問題が起こった際などは、正義を主張できる厳しさも必要ではないか。4年にわたる協力隊での生活は、「人間と人間の間には国境などない」ということを教えてくれた。そして数えきれないかけがえのない経験を与えてくれた。この経験を生かし、真の意味での国際感覚をもった人間として生きてゆきたいと思う。

4. 参考資料

1. 生徒代表の別れの言葉 (原文のまま=写真)
2. ホルへ君からの手紙 (原文のまま=写真)

こちら、加納先生^がを別れ^が今更し^が、5年^がの間、加納先生にお世話になり^が、先生と別れ^がはとてさびしいです。でもエル・サルバドルでの競争は激しくて、ここには日本で新しい仕事^が待っています。

今回、私たちはここにあり^が先生が^がしんぼうよく教^がえて下さったことに感謝^ががたいと思^がっています。そして、日本でのことがよくを^が思い出しています。先生と、勉強した^がら、ここを^が思い出しています。先生の言葉を^が忘れ^がないでしよう。

私たちがここを^がいつまで^が忘れ^がないで下^がさい。そして、またきて^がここに^が来て下^がさい。

私たちがぜひ^がたいに帰^がって来て下^がれようと思^がっています。なぜなら、加納先生^がの心は^が十分^が愛^がしたエル・サルバドル人^がだからです。

加納先生

どうも、おやが^がどうも、ごさ^がいした。

このころはいい天気になりました。雨期が終り、たがら
 すが加納先生はお元気です。しんじが、私は毎日のように
 日本語のクラスに通い続けています。ロス・アンゼルスで滞
 在は大変楽しめたでしょうが、早くとも仕事を終り、おち
 あい休みやお休みのために必要になると思っています。
 勝又先生は加納先生に始められたり、はな仕事を一先懸命
 続けたい、と生徒たちは皆前のように通い続けています。
 加納先生に三回ほど紹介して下さり、私はおちのちの申請
 たいと思つて、ご紹介します。実は三回ほど働いたがたの
 ことが原さん、私、三とを正統に扱って他がたがた
 私は今、家で父を手伝ってやったり、来年度の入学の勉強を
 したい、毎日忘がい、今度、本当に入学したいと思
 っています。加納先生の新しい便命は何でしょうか。日本で
 かつやを覗いてみたい。
 日本語を苦いことはもちろん、上手に話せることを
 私にとって、大問題です。だから、勝又先生は私に
 テープを聞いてもらって下さい。早く日本語を書ける話せ
 ようになりたいと思つて。
 加納先生の家族はお元気ですか。ご家族
 によろしくお伝え下さい。
 執筆ねにとぞお許し下さい。ごめん、お大事におつ
 てください。ご返事をお待ちしています。
 さようなら。
 11月13日
 加納先生へ

日本に帰って考えること

加 納 正 康

帰国してから現実にはまだ2年しかたっていないのだが、エル・サルヴァドルでの経験は、ずっと昔のことに思われてならない。それは今の仕事に忙殺されているからかもしれないが、あの経験が人生のひとつの節目になっているからであろう。

今、報告書類を読み返してみると、自分ながら、なんとエネルギーに活動したことかと驚かざるをえない。

日本語普及という面では、私はサ国ではパイオニアであったが故に、様々な機関で日本語教育を試みた。外務省での文化広報サービスの一般市民日本語講座、観光局での実用的な通訳ガイド養成講座、そして国立大学語学科での第2外国語としての日本語、さらに、語学センターの設立にまでこぎつけ、サ国における日本語教育の基盤ができあがったかにみえた。しかし、それは一睡の夢、学長が暗殺され、新しい学長になると語学センターは解消されてしまった。一方、フランシスコ・メネンデス高校での日本語コースは実務的な面を強調していた。高校レベルで日本語教育ができるなど夢のようであった。この3年6ヵ月の間、日本人会の日本語補習学校での授業を含めると、合計7つの機関で、延べ3,000時間以上を日本語教育に費やしたことになる。

また、毎日曜日は必ず、生徒や友人や同僚たちとサ國中を歩き回ったし、長期休暇の折は近隣諸国にも足を伸ばしていたし、あの行動力は、いったい、どこから生まれてきたのだろうか。

ひとつには、日本人を、日本を知っている人が中米には数少ない。だから1人でも多くの人に日本を知ってもらおうと、やっきになっていたからに違いない。一方、自分自身が何かを知りたい、何か自分とは異ったものに接してみたい、そしてまた、自分と共有できるものを確かめたいという願いが、あのような行動に私をかりたてたのではなかろうか。

今、ここで冷静に自分の行なってきたことを振り返ってみると、大地に根ざした日本語の普及ということを考えねばならなかったということである。

それには、教える側の十分な計画性、そして、1人であわてふためくのではなく、十分なスタッフを揃える必要があった。あまり無理をせず、着実に事を運んでいくことが大切である。単身者は、とかく働きすぎてしまい、現地の普通の人では、とうていできないほどの仕事を無理を承知でしてしまい、彼らとの折り合いがうまくいなくなるきらいがあるので、単身者よりも妻帯者の方がよいようにも思われる。そうしてこそ、地についた活動ができるのではないか。

ところで、残念なことに、協力隊員が行なうサ国での日本語教育は、政情不安により、私と私の後任の勝又女史の2代で中止になってしまった。それにもかかわらず、女史の献身的な働きにより、その後も、サルヴァドル人だけで日本語学習のグループが生まれ、少人数ながら日本語を勉強している。その中の1人、ホルヘ・サルヴァドル君が日本へ留学するという偉業をなし遂げた。これは、勝又女史の暖かい支援の賜物である。ホルヘ君は、「日本の商業や工業の進出がどんどんふえてきて、エル・サルヴァドルには、日本語ばかりではなくて、日本の社会や習慣などがわかる者が必要になると思います」と、手紙を書いてきている。

今後とも、ホルヘ君のような人物が1人でも多く世界各地に生まれることを祈ってやまない。



加納隊員の報告書を読んで

椎 名 和 男

理想と現実

真面目で、純粋な隊員ほど、理想と現実のギャップに悩み、また怒りにも似た気持ちをもつ。今回も隊員の報告書の中から、そのような叫びといおうか、悲痛なうめき声といおうか、そういったものを感じとった。

外国語の学習にとっては、学習の動機、学習者の努力と熱意、学習の環境、教材、教師等の問題が重要であるが、今回の加納隊員の報告書によれば、およそ、理想とはかけ離れた状況の下での日本語教育であったようだ。

当初のクラスは公開講座であり、主催者側に、クラスの最終目標や対象者が明確でなく、クラスの所属についても流動的であり、単に、やってみようか程度の考えしかないために、隊員の熱意が空回りしたといえよう。

国際協力事業に携わっている者は、要請者、要請国のニーズについては、心して対応しなければならぬと、国際文化交流に従事している私自身も常日頃から自戒している。それが、途上国からの要請というだけで人を送り、現在、どこそこの国に何百人送っていますというだけでは、真の技術協力、国際交流とはなり得ない。それが、どう生かされ、どう機能しているか、常に、しかも冷徹に見る目が必要である。この点、行動し、反省し、そして本来のあるべき姿を探る加納隊員の態度には感銘を受けた。

多くの障害を乗り越えて

加納隊員は、昭和50年6月から昭和53年12月まで、3年半にわたり、外務省、大学、高校等で、主として初級程度の日本語を教えたのであるが、主管が外務省から文部省に移ったり、政情が不安定で、しばしば大学が閉鎖され、さらに、2度のインシツカ社への日本人出向社員の誘拐事件の中で、時には自宅においての自主講座まで開き、総計380人余にのぼる学習者に日本語を教え、日本文化について、情熱的に教えた。急いでその足跡を辿ってみよう。外務省では当初、外務省職員と同国公務員を対象とするという話であったが、実態は同省主催の一般公開講座であり、入門クラスは週5時間、しかも夜間、70人でスタートしたクラスが、3ヵ月後に30人に減ってしまう。初

級コースも週5時間、20人でスタートしたクラスが3ヵ月後、8人になる。初めて海外で公開講座を担当する隊員は、通常ここでショックを受ける。国際交流基金でも現在30ヵ国余へ約100人の日本語教育専門家を派遣しているのだが、私はいつも、それらの人々に、このように語ることにしている。

「NHKの語学番組担当の方と話し合ったところ、語学用のテキストの発行部数は、4月のスタートの時、10万部とすれば、1ヵ月後は3万部、3ヵ月後は1万部を印刷すれば、返本がないそうです」。このことは、実は私自身が20年前、海外で経験し、悩んだことである。なぜ、学習者が減るのか、自分の教え方が悪いからだろうかと煩悶したものである。

私は正直、このNHKの語学テキストの話聞き、聞きなおって、以後のクラスに取り組むことができた。

加納隊員も学習者の減少という、誰もが乗り越えなければならない壁を越え、しかも日本語だけでなく、日本文化としての書道、映画、スライド、折り紙などまで教え、必死に仕事をする。そして、日本文化センター設置の夢を周囲に説く。

一方、加納隊員の所属が文部省に移管され、ヘネラル・フランシスコ・メネンデス国立高校に3年間のコースが、高校生を対象に開設されることとなる。同隊員は、エル・サルヴァドルの高校において日本語が教えられることは、取りも直さず、同国において日本語が外国語としての市民権を得る第一歩であると感じ込む。ところが、正式要請以外に着任時から続けていたエル・サルヴァドル国立大学での日本語教育は好意的な語学センター所長の失脚により、頓挫を来たしてしまう。そして、加納隊員には帰国の日が近づく。しかしながら、帰国間近いある日、同隊員は「日本語学生の会」が、日本語を学んだ人々の自主的な計画により発足するという話を聞く。そして同隊員の耳には、「先生が辛抱強く教えて下さったことに感謝します。またエル・サルヴァドルに、ぜひ、きて下さい。なぜなら先生の心は半分以上、エル・サルヴァドル人だからです」という送別会での学生の言葉が、今もって聞こえてくる。

おわりに

仕事に、挫折はつきものである。さらに、海外という、価値観や文化の異なったところでの仕事であるが故に誤解も生じやすい。加納隊員のように、現在海外で日本語教育に従事する隊員は、それらの多くの障害を乗り越えて

もりたい。そして、日本語教育が、教育という本質的な、根源的な面をもつこととも認識すべきであろう。（協力隊技術専門委員）

あ と が き

青年海外協力隊員の報告書集を発刊するに際し、数多い報告書を、どう分類し、いかに活用するか、いろいろ意見がありましたが、隊員の活動を広く紹介する観点から、まず国別編とし、昭和54年度から作成を始めました。55年度もこの方針を継続して9ヵ国編を作成いたしました。国別編が一巡した後は、順次、違った角度で報告書集の作成を続けていきたいと考えています。

国ごとに収録した報告書の数も、諸般の都合で数篇に限定せざるを得ませんでしたし、職種ごとの配分などについても、それぞれの国における協力隊の特徴をカバーしているかどうかなど、不十分な点もあろうかと存じますが、御活用下さる皆様からの御意見、御提言をいただきつつ、今後一層の充実をはかりたいと思います。

末筆ながら、この報告書集のために、御多忙中にもかかわらず、積極的に御協力いただき、報告書に対するコメントを御執筆下さった技術専門委員の方がた、ならびに報告書の収録を快諾され、「追記」の原稿を寄せられた隊員(OB)の皆様へ厚くお礼申し上げます。

なお、本報告書集の御活用にあたり、他への転載等を企画される場合は青年海外協力隊事務局(啓発課)に必ず御相談下さるようお願い申し上げます。

昭和55年12月

啓発課長 高橋成雄

海外協力の現場から——青年海外協力隊員の記録<エル・サルヴァドル編>

昭和55年12月発行

編者 国際協力事業団青年海外協力隊事務局

発行所 国際協力事業団青年海外協力隊事務局

〒150 東京都渋谷区広尾4-2-24

電話 (03) 400-7261 (代)

印刷所 邦美印刷株式会社

〔非売品〕

